

プロテスタント

日本伝道百五十年

—ともに記念し、ともに伝道するために—

近藤勝彦 著

編集者から第二版読者へのご挨拶

『美竹文庫』第二巻第二版を謹んでお届け申し上げます。初版と第二版とは、二カ所ほどの訂正があった他は、全く変更はありません。

第一巻の方は、大変ご好評の内に沢山の再注文をいただき、三千五百部がまたたき間に無くなってしまいました。各教会で修養会や読書会のテキストなどにお使いいただきました御由、心から感謝致しております。沢山の感謝状やご献金を賜りましたことも、この場をお借りして篤く御礼申し上げます。

第二巻は、特に日本におけるプロテスタント教会の伝道開始一五〇周年（二〇〇九年）を意識して主題が選ばれ、構成されています。私どもの教会では、伝道を考える場合

に、自分自身会の教会のみならず、日本の教会全体に於いて、宣教力の停滞と著しい《地盤沈下》を来している現状を無視することは出来ない、との思いを強く致しております。長老会では、そのような認識に基づき、私ども日本の教会が現在どのような一五〇年の日本伝道を総括し、どのようにこれからの五〇年ないしは一〇〇年を歩みはじめたらよいかを考えるために、今年五月、近藤勝彦先生を講師にお招きし、近隣の教会の兄弟姉妹をもお招きして公開講演会を開きました（なお詳しくは、本書一三二頁以下の、著者御自身による「あとがき」御参照のこと）。私どもは、先生の御講演から「日本の伝道はこれからだ」という力強いお言葉を頂き、大変大きな慰めと励ましを受けたことでした。そのようなわけで、是非これを一人でも多くの兄弟姉妹にお伝えいたしたく、本書を上梓する次第です。

従いまして、この時の御講演をもって本書の劈頭を飾らせていただきました。また、伝道について早くから深いご関心を抱き、日本の教会に警鐘を鳴らし続けてこられた近藤先生の御講演の中から数編をお選びいただき、更に聖書黙想三編をお加えい

ただき、一冊の本とすることが出来ました。全体の編集につきましては、美竹教会文庫委員会が責任を負っております。

第一巻同様、第二巻も、本教会の総会決議により、一切が伝道特別献金で賄われております。従って、教会で有益にお使いくださる場合に限り、送料とも無料で配布させていただきます（なお、皆さまからのご献金は今後の出版のために有益に用いさせていただきます。ご参考までに、一部の実費は三百円です）。

皆様の教会の主にあるご平安とご健勝を心からお祈り申し上げます。

二〇〇八年一月一日

美竹教会牧師 上田 光正

内容目次

編集者から第二版読者へのご挨拶 1

著者による序言 8

I

第一章 プロテスタント日本伝道一五〇年

——ともに記念し、ともに伝道するために—— 12

伝道のための黙想(一)

「一同の集まっていた場所が揺れ動き」

(使徒言行録四章三二節) 42

第二章 伝道を本質とする教会 49

II

伝道のための黙想(二)

「神の一ムナの力」(ルカによる福音書一九章一六節) 64

第三章 現代に福音を伝える 69

III

伝道のための黙想(三)

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」

(マタイによる福音書一四章三一節) 86

第四章 伝道の喜びに生きる 92

IV

第五章 何によって伝道者・牧師になるか 108

あとがき 132

「美竹文庫」の発刊の辞 134

プロテスタント日本伝道百五十年

——ともに記念し、ともに伝道するために——

近藤勝彦著

著者による序言

二〇〇九年は、プロテスタント・キリスト教の宣教師が太平洋をはるばる越えて来日し、福音伝道に着手して以来、ちょうど一五〇年に当たります。日本での伝道は、種々の原因により、なかなかの難事業でした。今でもなお難事業です。しかしそれでも、この国に福音が伝えられ、教会が築かれ、多くのキリスト者が生み出されてきました。私たちが今日、神の救いにあずかり、キリスト者として神と共に生きる信仰の喜びに日々生かされておりますことは、主イエス・キリストの贖いと御霊によって与えられた信仰によりますが、そこには多くの先人の祈りと証しに刻まれた教会の戦いがあったおかげです。あらためてそのことに感謝し、私たち自身も祈りと献身をもって、教会の伝道の戦いに参加したいと願います。

日本における伝道のための戦いは、いろいろな仕方で展望し、また構想することもできるでしょう。さまざまなキリスト教的奉仕の分野もあるでしょう。しかしここではもっとも基本的なことに関心を集中させています。それは、各地域における教会の伝道的戦いです。それが堅実に歩まれることが決定的に重要だと思っております。

プロテスタント日本伝道一五〇年にあたり、できるだけ多くの主にある兄弟姉妹と共に主の福音を感謝し、その救いにあずかって伝道することのできる信仰の喜びを共有したいと思います。そのために本書が少しでも役立つならば幸いです。

I

第一章 プロテスタント日本伝道一五〇年

——ともに記念し、ともに伝道するために——

はじめに

二〇〇九年は、日本にプロテスタント・キリスト教の信仰が伝えられて、ちょうど一五〇年を迎える年になります。このことは、日本のプロテスタント諸教会はもちろん、キリスト教諸学校やさまざまなキリスト教関係の諸事業にとっても一つの区切りとして、意味深い年を迎えることを意味します。また日本社会全体にとっても、過去一五〇年間、キリスト教との関わりを持ちながら、歩んできたことを考えさせる年でもあります。この機会に、プロテスタント日本伝道一五〇年の意義を理解して、日本社会におけるキリスト教会の成長や伝道の働きの進展の意味を理解し、有意義に

二〇〇九年を迎えるために力をあわせることができるようにしたいと思います。

一、日本におけるプロテスタント伝道のはじまり

日本におけるプロテスタント・キリスト教の伝道はいつから始まったのでしょうか。明治のキリスト者第一世代の一人、小崎弘道が「開教五十年記念会」の時に語った「五十年の回顧」によりますと、英国の宣教師ベッテルハイムが沖繩に来たのが一八四六年で、ペリーが浦賀に来航する七年前でした。さらには「アメリカン・ボード伝道会社」が日本伝道のために最初の寄付金を受けつけたのは、それ以前のこと、すでに一八二八年であったと言います。その他、中国伝道にきた宣教師が日本に立ち寄った例もあったようです。しかし一般には、プロテスタント伝道は、一八五九年（安政六年）に始まると考えられています。それは、日本が鎖国を解き、開港することになった「日米通商条約」の締結の翌年のことで、プロテスタント海外教会から按手札を受けた教職者が正式に宣教師としての任命を受けて、日本に派遣されてきました。その最初が、米国監督教会のリギンズとウイリアムズです。リギンズは一八五九年五月、長崎に、その翌月同じく長崎にウイリアムズがやってきました。同年一〇月に

は米国長老教会の宣教師ヘボンが神奈川に、翌一月には米国改革派教会のフルベッキが長崎に、そして宣教師ブラウンとシモンズが神奈川に到着しました。こうした宣教師の続々とした来日と、その活動の開始のゆえに、一八五九年をもって日本におけるプロテスタント・キリスト教の伝道開始の年と考えられるわけです。

伝道が開始したと言っても、明治六年にリシタン禁令の高札が撤去されるまでは本格的な伝道にはならなかったでしょう。外国人居留地の中の活動に止まりました。しかし限られた生活空間の中にあっても、彼らは聖書の翻訳事業に着手し、英語を教え、あるいは医療に従事しながら、周囲に伝道を開始しました。そのためその五〇年後、一九〇九年（明治四二年）には「開教五〇周年記念」の行事が行われ、一〇〇年後の一九五九年（昭和三四年）には「宣教百年」の記念行事が行われました。このようにして、二〇〇九年には「プロテスタント日本伝道一五〇年」の年を迎えるわけです。

二、日本の開国とキリスト教伝道

以上の経緯から、プロテスタント日本伝道の開始は、日本の開国と深く結びついていることが明らかです。既に述べましたようにキリスト教を「邪教」と見なした「キ

リシタン禁令の高札」が明治六年に撤去されたのも、岩倉具視を団長とした海外使節団が、新しい日本の建設のために欧米諸国を視察のため歴訪した際に、各国においてキリスト教弾圧を非難され、これをし続けては国際社会の一員に参加することは不可能と判断したためと言われます。日本のプロテスタント伝道の開始と進展は、日本がただ内向きに鎖国状態にいつづけることなく、広く外に向かって心を開くことと関連していました。

三、「プロテスタント日本伝道一五〇年」を覚える意味は何か

それでは、「プロテスタント日本伝道一五〇年」を自覚して迎えることには、一体どのような意味があるでしょうか。それにはまず、日本における福音伝道のこれまでの経過を回顧して、将来を展望すること自体、意味深いことと思われまふ。特にこれまでの経過に明らかかな神の恵みと祝福とを覚え、また同時に経験してきた伝道の困難を振り返って、その取り組みの不十分な点を反省することも必要なことでしょう。また今日の伝道の状況を認識し、私たちの教会生活やキリスト者としての信仰生活の課題を改めて把握し、将来の伝道の進展に備えることも必要なことでしょう。もちろ

ん、そうしたことは常に行なうべきことですが、特に「伝道一五〇年」という区切りの時に、そうした反省と展望の時をもつことは大切なことと思います。

特に神がこの国の人々に福音を伝えてくださったことを感謝し、なお福音を容易に受け入れようとする人々の魂の状態を考え、私たちキリスト者の伝道する姿勢について吟味し、伝道力をもった教会を形成し、伝道する信徒として育成される課題を認識する必要があります。現在、特に「キリスト教的な主体性」があらこちらで希薄になっていないでしょうか。その点を伝道の観点から吟味し、もしその状態があれば、それを克服して、「キリストの体」である教会の深い意味と、「主のもの」とされたキリスト者の「喜び」を深く知り、伝道にはげみたいと思います。

それと同時に「プロテスタント日本伝道一五〇年」には、さまざまな重大な事柄が関連しています。その関連事項についても認識しておくことが望ましいと思われま

四、プロテスタント伝道と関連した「近代日本の一五〇年」

プロテスタント日本伝道は、鎖国を止めて開国した日本の新しい歩みの一五〇年と同一の時代を歩んできました。「プロテスタント日本伝道一五〇年」ということは、

従って「近代日本の一五〇年」と重なっています。伝道一五〇年を覚えて、改めて日本伝道の姿勢を確認するとき、「近代日本の一五〇年」にキリスト教が果してきた意味も再認識されるべきと思われま

す。日本人はどちらかと言えば、さまざまなことを忘却しがちな国民で、日本のキリスト者自身も忘れてしまうところがありますから、思い起こす必要があるでしょう。日本人の精神や宗教的な魂に対してキリスト教が果してきた役割、さらには教育や社会事業を通して日本の文化や社会に果してきたキリスト教の意義も忘れるべきではないでしょう。日本の女子教育は一体誰がしてきたのでしょうか。児童教育も誰がしてきたのでしょうか。プロテスタント教会とキリスト者の働きを抜いて、それらを語ることはできません。医療についてもキリスト者の貢献がありました。語学教育は言うに及びません。宣教師へボンの功績はもっと評価されてよいのではないのでしょうか。植村正久はあるときへボンについて「日本の恩人なり」と語ったことがあります。近代文学に対するキリスト教の影響もあつたはず

です。片岡健吉に代表されるように自由民権運動も、あるいはまた吉野作造に代表されるように大正デモクラシーにもキリスト者の働きはあつたのです。

しかしそれでは日本は、この一五〇年間でキリスト教との関係も含めて「新しい国

「民性」を形成することができたでしょうか。先に述べた「五十一年の回顧」の中で小崎弘道は日本における「基督教の進歩が比較的遅々たる理由」や「我国の大欠陥」についても語っています。伝道の「遅々たる理由」としては他の文物とくらべて宗教心は最後に発揮されるという事情があると指摘し、その上で日本の特殊事情として「三百年來我国民の頭腦に基督教は邪教であるという偏見悪感を深く浸潤せしめたがため」なかなか伝道は進みがたいと語りました。また国家の「大欠陥」としては、政治法律の方面は制度を改めたが、「教の一方はそのままにして省る事なくほとんど識者の間に於いて放擲せられているような姿」であると指摘しました。そして「国体と基督教の間に衝突ありとの迷信が深く我が国民の精神にしみ込みいて容易に一掃すべからざるものがある」と語っています。基督教の伝道の推進と、日本の「新しい国民性」の形成とはどうしても深く関係しています。もちろん国民性は常に形成途上のもので、どの国民も完全な国民性に到達できるわけではありません。海老名弾正は「開教五十年記念会」の時に、基督教の世界主義、人類平等主義と一夫一婦制が日本人の倫理に影響を与えてきたと述べました。概してそのように言い得るでしょう。日本の新しい形成に基督教が果たしてきた役割についてはさらに精確な

研究が必要と思われる。いずれにしても、すでに歩まれてきた日本の形成をまったく基督教抜きに考えることはできないことも事実です。

しかしそれにしても大筋で言いますと、「大日本帝国憲法」や「教育勅語」による日本国民の形成は、一九世紀の世界の列強との競争の中で日本ナショナリズムを強化する方向に進み、「国体」「和魂」「日本精神」「大和魂」を強調しました。それは内容的には曖昧模糊としたものですが、基督教に対して対抗的という点ではかなりはっきりしていて、頑強に閉鎖的な点では一貫していたと言わなければなりません。人々の魂が基督教に対して開かれ、それによって深く影響されるということは、広い仕方では起こりませんでした。伝道は限られた範囲に止まり続けたわけでは

ありませんでした。一九四五年の敗戦以後、「新しい国民性」の形成が改めて課題として意識されました。しかし戦後六〇年間もこの課題に成功してきたとは言えないでしょう。戦後、日本人の魂は一方では経済利益を第一とする競争原理に捉えられ、しかも同時に画一主義的な集団主義的ナショナリズムが残りました。それをつきつめれば「国体的な魂」が心の底に存在し続けたということではないでしょうか。戦前から戦後へと、ある面国民の精神や価値意識は大きく転換しましたが、しかしその中で一貫して変らな

い日本人の魂があり、この日本人の魂は特殊的で、普遍的な正義の感覚には鈍く、「魂の鎖国」の状態は残り続けたのではなかったかと思われれます。「日本精神」の問題性を言うと日本社会一般には嫌われるでしょうが、集団主義的な結合はあっても、一人の人格として世に立ち、人格相互の関係を結ぶとか、あるいは民族を越えて他者を尊重し、愛をもって対するという生き方は希薄です。かつて小説家大仏次郎は自分を含めた日本人の「愛の底が浅い」と表現したことがあります。日本人の新しい国民性の中で、「普遍的な正義」と「他者に対する愛」、そして「集団や伝統からの自由」はなお形成課題です。こういう魂のあり方の問題は、キリスト教信仰と深く関係していると思われれます。日本人の魂は、日本人の「旧い在り方」に止まることで、本当の自由、深い愛、利害を超えた正義、そして時代の大勢や空気に支配されない勇氣、既成事実の積み重ねに屈しない合理性などを身につけることがなかなかできずにきたのではないのでしょうか。

現代では、「教育の問題」が重大な問題になってきています。そこにもやはり形を変えた旧形態の思想が現われています。「教育基本法」の改正では「愛国心」や「郷土愛」といったものでやっていくこうとする傾向が見られます。しかし社会の現実には、ある地域の学校では、半分以上の生徒が海外からきた外国人就労者の子供たちであるという事実もあるそうです。それは極端なケースであるとしても、いまやグローバルな社会に生きる人間の教育が求められているはずで、それをどうして「愛国心」や「郷土愛」で教育できるのでしょうか。もっと人間としての普遍的な教育、世界的な市民社会の一員としての人間の教育がその基礎になければならないでしょう。「旧ナショナルリズムへの回帰」によってやっていけないことは明らかです。「日本の国民性」あるいは「日本人の魂」は、他者と共に生きる、世界に開かれた国民、普遍的なものを共通基盤として持つ国民性の方向で陶冶され、その教育は、生命や人格を尊重し、自己の尊厳と共に他者を尊重する愛や自由、そして正義の感覚を養われた人間を目指すべきでしょう。日本におけるプロテスタント・キリスト教の成長は、日本人の新しい国民性の形成のためにも重大なテーマです。

五、日米関係の一五〇年

「プロテスタント日本伝道一五〇年」はまた、日本の国際関係の一五〇年ですが、日本が多く福音伝道を受け取った関係から言いますと、「日米関係の一五〇年」でも

あります。日米関係は、一般には政治関係、経済関係、軍事関係などで見られ、あるいはせいぜい文化やスポーツの関係で見られています。しかしそれだけでなく「日米のキリスト教的関係」があります。日本では戦後、日米関係はもっぱら政治・経済と軍事の関係で理解され、「対米追従」が非難されたり、逆に「日米同盟」は国益のために外交の基本と言われたりしてきました。国際関係を強調する人々が対米追従を非難し、ナショナリストたちが政治的、外交的な親米派を名乗る「ねじれ現象」が見られます。こういう中で政治や経済の次元だけでなく、また軍事の観点だけでなく、キリスト教の視点からアメリカを深く理解し、また日米関係を育むことのできる人々が日本社会には必要ではないでしょうか。新渡戸稲造が「太平洋の架け橋」と言いましたが、実際は、プロテスタント教会が政治や経済のレベルと違う、もっと魂の深みにおいて「太平洋の架け橋」であるべきでしょう。日本のプロテスタント・キリスト教の出発とその後の経過は、実に多くのアメリカ、あるいはカナダなどからの宣教師、あるいは信徒の教育者により、かれらの献身と背後にあった諸教会の精神的、そして資金的な応援によって支えられてきたものです。札幌バンド、横浜バンド、熊本バンドがそうです。札幌バンドのクラークも、熊本バンドのジェーンズもアメリカからきた信徒伝道者でした。横浜バンドは本格的な宣教師ヘボン、バラ、ブラウンなどによって指導されました。教会だけではありません。キリスト教学校が多く彼らの貢献によりました。

戦後の復興期にも日本の教会はアメリカの教会から多大の援助を受けました。そしてその関係がJNAC（日本―北米協力伝道委員会）という組織が解散したことによって終焉を迎えたのはつい最近のことです。

アメリカの教会との関係は明らかに転換期を迎え、両国キリスト教の関係維持は今後一層難しくなることが予想されます。それだけに日本の教会の課題として、「キリスト教的アメリカ」を理解する人々を育成すること、アメリカとのキリスト教的関係を体現し、理解し、促進できる人を育てる必要があります。問題は人間の問題です。人間を育てるといふ問題です。それはまさしくキリスト教会の課題であり、日本社会の中で意味のある重大な課題だと思います。またキリスト教学校がとりわけ政策的に考える分野でしょう。日本における「アメリカ研究」は無教会の高木八尺以来、研究が積み重ねられてきました。しかしその研究者の中にもキリスト者がいなくなりまして。キリスト教的な深みから、アメリカの精神や文化を支えている重大な拠点である

背後の諸教会を理解できる人、キリスト教的日米関係が分かる人が必要です。両国の教会のためにも、また日本のキリスト教学校のためにもそうした人が重要ですし、日米関係のために重要です。何より日本社会のために重要です。

六、東アジアの福音主義キリスト教

「プロテスタント日本伝道一五〇年」は、日本におけるプロテスタント伝道ですが、それは決して日本伝道だけで孤立したものではありません。巨視的に見ますと、もっと大きな東アジアのプロテスタント伝道の一環に位置していました。正確に言えば、数年の差はあるでしょう。しかし日本と韓国、そして中国と台湾の伝道は、大きな視点で見ると、同一のルーツを持っています。東アジアの人々は、一九世紀の「プロテスタント世界大伝道」によって福音に触れたのです。韓国伝道の最初の宣教師アングラーウッドは横浜で聖書を印刷して朝鮮半島に持ち込んだと聞いたことがあります。一九世紀のプロテスタントによるアジア伝道は、プロテスタント・リヴァイバリズム、敬虔主義的信仰復興運動による伝道的キリスト教がもたらしたものです。それは「福音主義的キリスト教」と言うべきものです。この福音主義には教会の人々の心

を捉えて伝道へと掻き立て、魂を捉えて海外宣教師として献身させ、太平洋の海原を越えて異国に赴かせる力がありました。見知らぬ地の言語、習慣、文化の壁を越えて、福音を伝えさせる力がありました。「伝道一五〇年」の記念はこの「福音主義」を内側からもう一度学び直すときとなるべきでしょう。この福音主義に立ち戻ったなら、国境を越えて、日本、韓国、台湾のプロテスタント教会は同一のルーツに至ると言ってもよいでしょう。

先ほど述べたアングラーウッドは、韓国最初の教会「セムナン教会」の創立者であるとともに、神学部をもったキリスト教私立大学「延世大学」の創立者でもありました。また台湾北部に伝道した代表的な宣教師マカイは、スコットランド生まれ、カナダ育ちで、台湾にわたった長老派の宣教師でした。その経路はオランダ生まれでアメリカ育ち、そして日本の長崎に来た宣教師フルベッキとよく似ています。マカイは台北近郊の淡水に教会を設立するとともに、台北の大きなマカイ病院の創立者であり、「台湾神学大学」の創立者でもありました。日本に来たヘボンもまた医者としての功績もあり、明治学院大学の設立にも参与した宣教師です。こうした宣教師たちの働きには類似性があります。働きの類似性は、働く状況の類似にもよるでしょうが、それ

だけでなく彼らの信仰の類似性からも由来していると考えられます。今、名を上げた人々はみなカルヴァン主義的な福音主義の人々です。これにはさらにメソヂスト教会や他の敬虔主義者たちの働きを加えることができるでしょう。東アジアのプロテスタント・キリスト教は、元来「伝道的なプロテスタント福音主義」です。これをルーツとした東アジアのプロテスタント・エキュメニズムを構想することもできます。それは東アジアの伝道を協力的に推進し得ると共に、さらには人格と人権を尊重した民主的アジアの形成の精神的な支柱になることができるでしょう。

七、これまでの記念事業はどう行なわれたか

——日本の教会の過去と現在の相違——

日本のプロテスタント教会は、過去二回、五〇年のときと一〇〇年のとき、伝道記念行事を行ないました。「開教五十年記念会」は、一九〇九年（明治四二年）一〇月五日から一〇日までの六日間、東京、神田の「基督教青年会館」（YMCA）を会場として行われました。その集会の数一五回、講演者数約九〇名、聴衆は毎日、五、六百人から千二、三百人の間で「頗る盛会であった」と言われています。その詳細

は、『開教五十年記念講演集・附祝典記録』（鶴飼猛編、教文館、警醒社、明治四三年）として出版されています。五八〇頁にわたる記録集です。この会のために「開教五十年記念委員会」が結成され、小崎弘道が委員長を務め、本多庸一、井深梶之助、平岩愼保など、当時の日本基督教会、日本基督組合教会、日本メソヂスト教会の代表的な人々が加わりました。その講演者ならびに講演題目を見るだけで、その活力の盛んな様子が伝わってきます。感謝会の開会演説は宣教師バラが行い、祝会では「五十年の回顧」と題して小崎弘道と宣教師イムブリーが語りました。第一講演会は教育部門についてなされ、講演者や題目の一部を挙げれば、キリスト教教育について井深梶之助、教役者の養成について原田助など、第二講演会はキリスト教文学について、柏井園や田村直臣など、第三講演会は「日本の倫理宗教思想及国民生活に及ぼせる基督教の感化」と題して、海老名弾正と新渡戸稲造が講演しています。第四講演会は婦人伝道者、婦人会、女子教育について、第五講演会は社会改良について、病院、養護施設、矯風事業などについて、第六講演会はキリスト教と社会問題について、宣教師ハリスや山室軍平などが、そして第七講演会では牧会事業、礼拝、説教等について、平岩愼保、植村正久など、第八講演会は伝道事業、市内伝道、地方伝道、青年伝道につ

いて、第九講演会は民権及び信教自由に於ける基督教の影響について、衆議院議員島田三郎など、第十講演会は宣教師の事業について山本秀煌、本多庸一、再び植村正久など、そして最後の一日は、宮川経輝の説教による礼拝と聖餐式をもって終わっています。この記録集を詳しく読めば、それ以前の五〇年間の伝道についてのみならず、当時の様子がかなり分かり、また現代の伝道に対する励ましと反省や有意義な示唆を受けることができるでしょう。

「宣教百年記念大会」は、一九五九年（昭和三四年）一月一日から一週間にわたって行なわれました。一日は聖日に当り、各教会で個別に主日礼拝を宣教百年記念礼拝として守り、説教で宣教百年について言及するように要請されました。午後には「教会学校生徒大会」が日比谷野外音楽堂で行われ、参加者は二〇〇余の教会学校から、生徒約五〇〇〇人が集まったと言われます。二日は夜、富士見町教会において講演会が行われ、講演者は当時WCCを代表して来日したヴィサー・トーフトでした。三日の午後が最大の行事で、都体育館において、教団議長白井慶吉の司式、聖公会司教八代斌助ひんすけの説教による記念礼拝が行なわれ、収容定員一万人の会場はいっぱいに埋められました。礼拝後、記念式典が行なわれ、NCC総会議長武藤健の式辞、来賓の

挨拶などがあり、勤続四〇年、五〇年の教職、信仰生活五〇年以上の信徒の表彰と記念品の授与などが行われました。その後、日本青年館で記念晩餐会、海外からの招待者の挨拶などがありました。同日夜は、都体育館において記念講演会が開催され、講師は衆議院議員北村徳太郎と旧約学者渡辺善太でした。四日の夜は都体育館で青年大会が、六日の午後には女子学院講堂で婦人大会が行われました。宣教百年を記念する出版には、『日本キリスト教宣教百年を記念して』などがありますが、当時とうじということが語られたか、そこからどのような指針が現代に語りかけられているのか、もう少し多くの見解がまとまった書物の形で残されていたらよかったです。

そして今、一年半後に伝道一五〇年を迎えます。聖公会は記念行事を予定していると聞きますが、日本基督教団では何の決断もできていません。一五〇年記念は何もしないということになるかもしれません。大したことはできないと誰もが知っているということでしょうか。この変化は一体何でしょうか。どこからきた変化でしょうか。教会や信徒数の数が違うのでしょうか。そうではありません。「開教五十年記念会」の時の信徒数は、その時の宣教師イムブリーの講演によると七万五千人と言われています。今日の日本基督教団だけで、現住陪餐会員（主日礼拝に集う信徒数）一〇万人

弱ですから、他の関係教派を加えれば当然当時の二倍以上はあるはずです。それに戦後伝道を開始した福音派の働きも加わっています。プロテスタント信徒数五〇万人とも言われます。しかし問題は数ではありません。かつてあった「伝道の元氣」「伝道の氣力」がどうなったかという問題です。「プロテスタント日本伝道一五〇年」は日本における福音主義キリスト教の伝道の正念場に立っていると言わなければなりません。本物の伝道はこれからだと言うべきです。

教会数や会員数の問題ではなく、元氣の問題、靈的な力の問題があり、信仰の生命と力が衰退していないか、という問題があります。もしそうなら、それには色々な原因があるでしょう。大きな原因にはやはり日本基督教団の紛争の実害があります。伝道しようとする一つの心になっていない。百年前の「開教五十年」の時には、信仰の理解という点では、掘り下げた一致は決して磐石ではありませんでした。新渡戸稲造、海老名弾正、山室軍平など、キリスト教信仰と言ってもその内容や主張はさまざまです。しかしキリスト教伝道にかける心では根本的に一致していません。しかし現在ではこの一致は、福音理解の明確な一致を伴ったほうがよいでしょう。そうでなければ本物の力にはならないと思います。また福音の理解が深く正しくなければ、伝道

の力は湧かないでしょう。福音理解の深く正しい一致を持った仕方、キリスト教信仰のアイデンティティを明確にし、キリストに結ばれた喜びと力によって伝道する必要がある。ここでは現状の問題を逐一点検し、自己批判をする余裕はありませんが、キリスト教的なアイデンティティの深く明確な自覚が必要ということを確認したいと思います。大切なのは、「キリスト教信仰の本筋」に立つこと、主イエス・キリストにある神の救いの御業に深く立脚することです。キリストの十字架の死、そして甦りのキリストとの結合による神の救いに生かされることです。キリストにおける神の救いの出来事を深く掘り下げ、信仰の喜びと力を与えられ、希望を支えられ、福音主義キリスト教の信仰に共に属する信仰的主体性を確かにすることです。そして世界を救い得る名はイエス・キリストをおいて他にないことを改めて明確に発言することです。

八、忍耐強い伝道

「プロテスタント日本伝道一五〇年」は忍耐の一五〇年でした。「御言葉を宣べ伝えなさい。時がよくても悪くても、それを励み」(テモテ二、四・二口語訳)と聖書に

ありますが、この一五〇年間の日本伝道において、「良いとき」と言えるのはごく僅かではなかったかと思われます。明治一〇年代と昭和二〇年代の国家秩序の転換期の時代がそうでしょう。しかしそれを除いて、日本での福音伝道は「良いとき」と言えるときの非常に少ない状態で推移してきました。かつては大日本帝国時代におけるナショナリズムの桎梏^{しごく}、戦後は経済一辺倒のこの世的利益中心の画一主義、その中での伝道でした。この状態の中でこの三、四〇年間、「キリスト教的アイデンティティ」の方がむしろ弱体化し、希薄化してきているのではないかと危惧されます。キリスト教大学の紛争、そして教団紛争、そして信仰の敬虔の喪失が生じ、現在では洗礼を受けた人だけによる陪餐を維持できない状態、つまり聖餐というキリスト教にとってきわめて重大な奥義を信仰によって維持できず、実質のないものにしてしまう一種の世俗化が起きています。あるいはキリスト教学校でのキリスト者教員比率の極度の減少、大学などでひどい場合は一割もない、つまり実質的キリスト教教育の崩壊が起きています。キリストの救いの出来事を伝える霊的な愛が冷え、伝道の気力が萎えていると言わなければならないでしょう。この状況で、忍耐強い伝道、希望と気力を失わない伝道のためには何が必要でしょうか。

「開教五十年記念会」の色々な講演の中に、植村正久が語った「牧会事業」という話があります。植村はひょっとすると一週間も記念集会を続ける大きな会の持ち方には批判的であったのかもしれませんが。彼は開教五十年記念委員会のメンバーには加わっていません。あるいは親友とも言われる小崎弘道が委員長をしているので話を引き受けたのかも知れませんが。それでも「牧会事業」のほか「過去及び将来における宣教師の事業」というテーマでも講演しています。その「牧会事業」という話の中で、さすが、要するに重大なことは一つだと語りました。伝道者の数が足りないということではない。人は多すぎる。何が足りないか。「最も大切なことは即ち牧師が自ら信仰の厚きものになることです」。そう言って、ジョン・ウェスレーが語った「罪をくみ神のほか何も恐れられないものが百人あるならば世界を動かすことができる」という言葉を紹介しました。プロテスタント日本伝道一五〇年を記念する意味は、牧師をはじめとして、それ以前に神学校の教師が「信仰の厚いものになる」、そしていま信仰生活を与えられている教会の方々が「信仰厚きもの」とされることでしょう。それでは「信仰厚きもの」にどのようなようにしてされるのでしょうか。聖書を読むことです。聖書によって御言葉に聞くことです。そして祈ることです。日本の教会は新年初頭の祈禱

会から出発しました。それが伝道的なプロテスタント福音主義の行き方でした。御言葉に聞いて、祈りによって、神との生きた交わりに生かされる。そのように聖書に聞き、祈る信仰の生活が重大です。それが日本において伝道一五〇年を記念する「福音主義」の信仰の根本性格です。そして神を神として正しく分かるのでなければ信仰は力を持ちません。そうでなければ厚い信仰、深い信仰にはならないでしょう。神とその慈愛の大きさを小さく考えるのでは貧弱な信仰にしかありません。神とその憐れみ、そして救いのご計画を正しく、また深く理解する、その偉大な働きを知ることです。それは主イエス・キリストの人格とその出来事を通して働いておられる神の御業を深く理解し、今日共にいます甦りの主キリストによって神を知ることです。信仰厚いキリスト教は神とその大いなる御業の「深く正しい理解」に基づきます。教理的に神の御業の中心を深く理解し、厚い信仰を支え、忍耐強い伝道力を発揮する、そういう「福音主義キリスト教」に改めて立つ必要があります。偉大な敬虔主義的キリスト教が神の客観的な救いの御業の理解によって支えられるのです。信仰は神との交わりです。正しく深い神の理解がこの交わりを支えます。これからプロテスタント伝道の正念場です。聖書を読み、祈るキリスト教、主キリストにある神とその救いの御業

を深く正しく理解するキリスト教、教理的理解に支えられた御言葉と祈りのキリスト教、そういう福音主義キリスト教に立つべきだと思います。

「ヘブル人への手紙」の二二章三節に、「あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように、御自分に対する罪人たちのこのような反抗を忍耐された方のことを、よく考えなさい」とあります。信仰生活の底力として主イエス・キリストのことを「よく考える」ことが不可欠です。そして忍耐強く伝道する教会、氣力を失わないキリスト教学校や施設、伝道の確信を持った教職や信徒であることです。主イエス・キリストのこと、主が果された救いの御業のことを「よく考える」ことは、福音の宝を深く掘り下げることです。それは漠然と知るのでなく、また気分的、主観的に知るのでありません。主イエス・キリストとその出来事の実に即し、使徒たちの証言に即して知る、つまりは聖書的、信仰告白的に、そして教理的に知ることです。私たち自身の氣力が尽きても、主イエス・キリスト御自身が私たちと共にいてくださいます。そしてキリストにおける神の救いの御業が客観的にあり、聖霊の取り成しがあります。その神の御業があると、根拠ある仕方、筋道のある仕方理解する必要があります。それが「伝道の底力」になります。日本の伝道はこれからです。

九、日本伝道はこれから

——神の言葉としての福音そのものの力——

「日本の伝道はこれから」と言うのは、「世界の伝道はこれから」であり、その一環として言われることですが、二つの理由を上げたいと思います。一つは「キリストにおける神の救済の御業」は最後究極の救いであり、それを伝える言葉、つまり福音には力があるということです。「あなたの一ムナが十ムナをかせぎました」（ルカによる福音書一九章一六節の文字通りの訳）。神の一ムナにはそれ自体の力があります。福音にはそれ自体の力があり、再び活性化させる力があります。キリスト教信仰は、神の福音の力によって回復され続ける信仰です。キリスト教信仰は神の言葉それ自体の力ゆえに、信仰復興的な信仰です。キリスト教会の歴史は御言葉の力、また聖霊の働きによってなされた信仰復興の歴史です。そもそも「福音」が主の復活（re-surrection）により私たちの贖い（re-demption）を与え、和解（reconciliation）と再生（re-generation）を起こすように、キリスト教の歴史には宗教改革（re-formation）、信仰復興（re-vival）が生じます。

もう一つは、キリストの贖罪によって神が世と和解してくださったことは、万物の救済と完成に向かっていているということです。和解は終末の完成を保証しています。完成はまだきていません。それは和解の福音を宣べ伝える伝道になお時が与えられていることを意味しています。神は忍耐強い神です。それゆえに、「日本の伝道はこれから」です。

キリスト教史上、宗教改革がただ一度一六世紀にあっただけではありません。その信仰が正統主義によって硬化し、冷却したとき、一七世紀には敬虔主義運動が生まれました。同じ一七世紀イングランドではピューリタニズムが生まれ、「宗教改革の宗教学改革」を前進させました。一八世紀、信仰が形骸化したとき、ヘルンフォート兄弟団やウエスレー兄弟のメソディズム、それにカルヴィニステック・メソディズム、あるいはジョンナサン・エドワーズらの福音主義的信仰復興運動が起きました。そして一九世紀、プロテスタント信仰復興運動は世界大伝道をもたらしました。二〇世紀の色々な福音派の活躍も挙げる事ができるでしょう。そして二一世紀です。日本の教会も含めて、神の福音の力が再生的に働くに違いありません。人々が起こされるに違いありません。そのために聖霊が働きます。献身者が起こされるでしょう。牧師も信徒も、そして神学的奉仕に携わる者も、「信仰厚きもの」に変えられます。知恵深く、

謙遜で、忍耐力のあるものとされます。神は生きておられ、神の救済史はなお前進するからです。御子なる神の十字架は決して虚しく終わらないからです。

神の救いの御業にある、汲み尽くし得ない力は、異なった状況においてまた新しい力を発揮します。キリストの出来事における神の救いの御業があるゆえに、その福音は信仰復興を起こします。世界伝道全体がそうですが、日本の伝道もこれからです。伝道のために祈り思惟する神学は、P・T・フォーサイスが語ったように、「世紀単位」で考えるべきです。

一〇、福音主義キリスト教の道

「福音主義キリスト教」は、「聖書に聞き、祈り、キリストとその恵みの働きを深く知るキリスト教」です。神の御業を深く理解するゆえに、当然、生き生きと感謝するキリスト教です。献身の志に燃えるキリスト教です。贖罪愛に生かされて、隣人にたいする愛に生きます。聖書と祈り、信仰告白と生きた確信、献身の喜びをもったキリスト教です。その深い教理的理解によって命を与えられ、そのためになら命をかけることができる恵みの神を知るキリスト教です。そこで牧師の課題として福音の宝を深

く知らせる説教をしなければなりません。それは教理のないキリスト教ではできないことです。できても弱いでしょう。試練に耐えられません。信徒の信仰にとって、聖書を読み、祈る、そして神の憐れみを深く理解することが必要です。もっと聖書に親しみ、もっと祈りましょう。聖書を読むというのは、生き生きと読むことです。それによって生かされる仕方を読むことです。祈るというのは、神に対する信頼と愛を持って心を神に打ち明けて祈ることです。神に聞かれている祈りを祈っているのです。そして礼拝は神の恵みに応答する信仰告白的な礼拝として、意志的に応答する礼拝としてささげられるはずで

す。教理の中でとりわけ贖罪の教理、そして和解の教理が明確でなければなりません。そして神の右に高擧され、それゆえ今現に共にいてくださる甦りのキリストを知り、キリストと一つに結ばれた信仰を生きていることが重大です。そして神の救済の歴史の中で救われたものとして伝道に用いられることを知る信仰が必要です。伝道はあってもなくてもよいものではありません。キリストが十字架にかかれたのに、十字架の言葉による伝道がないのは、キリストの十字架を虚しくしてしまいます。信仰はあってもなくてもよいものではありません。主イエス・キリストを信じることは、主イ

エス・キリストと一つに結ばれることで、主が果された神との和解の中にいれられることです。そのようにして本当にキリストに捉えられていることを捉えるのです。洗礼は受けても受けなくてもよいものではありません。洗礼はキリストと共に罪に死に、神に生きることであって、受けなければならぬものです。聖餐は受けても受けなくてもよいものではありません。聖餐によって主キリストの体と血とを受け、主イエスの贖罪の恵みと神の国の約束に与るのです。信仰、洗礼、聖餐には救いのために不可欠な意味があります。それによってキリストを本当に獲得して救いに入れられるのです。信じて洗礼を受けるものが救われるのです。ですから伝道がなければならぬのです。そうした贖罪、和解、信仰、洗礼、聖餐、そして伝道の理解によって、愛と謙遜をもった伝道するキリスト者の性格が形作られます。「教理的で敬虔なキリスト教」、それが「謙遜で伝道的な福音主義的キリスト者」を生み出すでしょう。

信仰を厚くして「伝道一五〇年」を迎えたいと思います。主の十字架の事実に基づいて甦りの主と共に歩む信仰を持って伝道一五〇年を迎えたいと思います。三位一体の神の救いの歴史の中で伝道一五〇年を迎えたいと思います。教会は、「伝道する教会」です。伝道者・牧師は「伝道を喜びとする牧師」です。信徒は「伝道を光榮とする

信徒」、愛と謙遜をもって証しする信徒です。神学は、「教会、教職、信徒の伝道的な性格を形づくる福音の教理的理解」のために奉仕しなければなりません。本当の神学によって、伝道する者は忍耐力を保持します。

結論として、伝道一五〇年の活動について次のように言うことができます。

一、生き生きとした仕方で聖書を読もう、二、神の恵みと憐れみを信頼して、心を打ち明けた祈りを神にささげよう。三、「深く正しい教理的キリスト教」によって、喜びの深い信仰に生きよう。四、確信を持って礼拝し、御言葉の力を信じて伝道しよう。つまり、聖書を読み、祈る教会運動、そして福音を深く学ぶ教会運動、福音を深く理解して伝道する福音主義的教会運動を生きることです。具体的に何ができるようにしようか。今、私たちに与えられている持ち場で、信仰厚きものとされて、今この時代になし得る最善を尽くすことです。そうすることで、「伝道の禱たすき」を次の世代につなぎたいと思います。今、どう戦い、どう苦心し、どう悔い改め、どう喜び、どう希望しているかを明らかにして、将来の人に伝えたいと思います。これからが日本の伝道の正念場だからです。

「一同が集まっていた場所が揺れ動き」

(使徒言行録四章三一節)

教会が試練にあい、難しい状況に立ち至ったとき、「教会に集う一同の祈り」が重大です。教会の皆が祈るとき、道が開かれます。だから教会は祈りの群でなければならぬと、御言葉は語っています。

この箇所は、使徒言行録三章から始まる長い一連の叙述の締めくくりの部分です。ことは、ペトロとヨハネが神殿の「美しい門」のそばで、施しを乞うていた足の効かない男を、主イエスの名によって立ち上がらせた奇蹟から始まりました。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名に

よって立ち上がり、歩きなさい」。そう言って、右手を取って彼を立ち上がらせたというのです。続いてペトロは、「イエスによる信仰がこの人を癒した」と説教しました。それに対し、エルサレムの指導者たちは、この二人を捕らえて牢にいれ、翌日、尋問の場に引出しました。結果は「今後イエスの名によって誰にも話すな」という脅しでした。ペトロは応えます。「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです」。すると「議員や他の者たちは、二人を更に脅してから釈放した」というのです。こうしてこの聖書の箇所になります。教会はイエス・キリストの御名を伝える伝道が決して容易でないという現実に直面しました。伝道は、しばしば世の脅しに耐えて、なされなければならないというのです。

そのとき教会の祈りが必要です。二三節では、ペトロとヨハネの二人は釈放されると「仲間」のところに行き、祭司長たちや長老たちの脅しを残らず話したとあります。報告を聞いた仲間たちは「心を一つにし、神に向かって声を上げて」言いました。教会の仲間の祈りは、「心を一つに」して、「声をあげて」「神に向かって」祈られます。伝道が困難に直面したとき、教会が試練にあったとき、どう祈ったらよいで

しょうか。祈りの内容もここに記されています。それがこの聖書箇所を特別なものにしていきます。他にこのような聖書の箇所はありません。「教会の祈り」を教える重大な箇所がここにあると言われます。

聖書の中で祈りを教えているのは、もちろんルカ福音書や使徒言行録だけではありません。例えば「主の祈り」を教えている箇所にはもう一つ、マタイによる福音書(八章)もあります。マタイによる福音書が示している祈りの教えも重要です。そこには「会堂や大通りの角」で祈るのでなく、「奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父」に祈りなさいと教えられています。祈るためには一人になって、密かに祈るのです。わたしたちには、個人として密かに祈る生活がなければなりません。隠れたところで密かに祈る個室の祈りが大切です。しかし使徒言行録は個室の祈りでなく、仲間の祈り、一同が心を一つにし、声をあげて祈ることを重大と言います。マタイ福音書と使徒言行録のどちらかを選ぶというのではありません。マタイも大切、ルカが記した使徒言行録も重要です。ただここでは使徒言行録の語る教会の祈りに注意を向けなければなりません。

使徒言行録が「教会の祈り」を重視していることは他の箇所によっても明らかです。使徒言行録は、祈りを「教会のしるし」としていると言ってもよいと思います。「教会のしるし」には、通常、福音主義教会では「御言葉」が正しく語られ、「聖礼典」が正しく行なわれることの二つが挙げられます。しかし使徒言行録によりますと、「祈り」も教会のしるしです。ペンテコステの記述の結末に、「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(二・四二)とあります。「祈ること」は、使徒の教えや相互の交わりとともに、パンを裂く聖餐とともに、「教会のしるし」に挙げられています。祈りが無くては教会ではありません。祈りが無くては、御言葉を正しく語ることもできません。ですから使徒たちは「祈りと御言葉の奉仕」に専念するとも語られます(六・四)。

祈りの内容はどういうものでしょうか。祈りの中で「主よ、あなたは天と地と海と、そしてそこにあるすべてのものを造られた方です」と告白されています。そして次に主イエスの受難に思いが向けられています。その上で、率直に願いが祈られます。「主よ、今こそ彼らの脅しに目を留めてください」と。教会が困難に対応するには色々な手立てが考えられるかもしれませんが。しかし教会に本質的なことを言えば、単純にただ一つの道があるだけです。それは、神に対して、私たちの状況に目を留め

てくださいと祈ることです。神は、もちろん、私たちが祈らなければ、私たちの窮状をご存知ない方ではありません。神はすべてをご存知です。しかしその神に、私たちの状況に目を留めてくださいと祈ります。そのように祈ることを聖書は勧めています。私たちが祈ることで、いよいよ神は私たちの窮状に注意を向けてくださいいます。私たちの伝道がどういう困難に直面しているのか、その窮状に目を留めてくださいと祈るべきです。あなたは天と地、その万物の創造者です。そして今、私たちは主の十字架の下に立って、あなたに恵みのご計画があることを信じています。私たちの状況に目を留めてください。それが聖書に示されている教会の祈りです。

窮状に目を留めて、そこから脱出させてほしいと祈ってはいけません。脅しや妨害に目を留めて、それらをなくしてほしいとは祈られていないのです。そうでなく、「思い切って大胆に御言葉を語ることができるようになってください」と祈るのです。それが伝道する教会の祈りです。「教会のしるし」は御言葉が正しく語られること、そして聖礼典が正しく行なわれることと言いました。しかし御言葉を正しく語るとは、「思い切って大胆に」語ることです。思い切って大胆に語るのではなく、御言葉を正しく語ったことになりません。神の恵みそのものが、主イエスの十字架にあるよう

に、思い切って大胆な恵みだからです。福音そのものが思い切って大胆です。「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいた」とパウロは言いました。「敵であったときでさえ」です。御言葉を語る言葉は、大胆でなければなりません。そのために祈りがなくてはならないのです。「祈り」と「御言葉の奉仕」は切り離すことができません。

祈りが終わると一同の集まっていた場所が揺れ動きました。これはギリシャ文学の表現方法が採用されたものと言われます。祈りが終わると一同は同意してアーメンと言うでしょう。このときもそうだったでしょう。しかし聖書はそれよりも、神が同意を示された、神が祈りを聞かれ、神のアーメンがあったと伝えているのです。それがその場所が揺れ動いたという表現です。そして神がアーメンと言ってくださいるとき、皆、聖霊に満たされ、大胆に神の言葉を語り出しました。ペンテコステが再現したのです。皆が心をついにし、神に向かって声を上げて祈るとき、神は聞いてくださり、同意してくださいます。神が教会の祈りに同意してくださることは、文字通りその場所が揺れ動くよりも大きな出来事です。そのとき、ペンテコステが再現します。今、日本の教会に必要なのは、教会の祈りとペンテコステ再現ではないでしょうか。神は

生ける神ですから、このことは起こります。神の同意によって、日本伝道を推進するペンテコステ再現が起こる。福音の伝道の歴史はそうようにして繰り返し力を与えられてきたのです。

第二章 伝道を本質とする教会

伝道はただ、教会の数ある活動と並ぶその一つの活動というものではありません。礼拝と共に、伝道は教会の本質をなしています。そのことをもう一度お話し、そのうえで実際に教会生活の中でどのように伝道する姿勢が育てられるかをお話したいと思います。

一、伝道を本質とする教会

初代教会は「伝道する教会」でした。また教会として実を結ぶのが「伝道」でした。伝道は、主の福音を伝える活動ですが、それはさらに「父と子と聖霊の名によってバプテスマをささずける」ことであり、バプテスマを通して一人の人を神との和解に招き、神の民である教会の中に加えることでした。教会は本質的に伝道する教会で

あったし、伝道は本質的に教会的な活動でした。その後の教会の歴史においてもこのことは変わりはありません。しかし實際上、真の教会は伝道する教会であるということが、常に認識され続けてきたわけではありません。伝道を忘れた教会がなくはなかったのです。また伝道活動が教会として実を結び、洗礼を通して神の民に加えることであることを正しく認識しなかった場合もありました。

一体、真の教会は「伝道する教会」であるということは、どのようにその理由を説明することができるでしょうか。主イエスの伝道命令が、教会の本質をなしていると言えるのはなぜでしょうか。根本的にはそれは、教会が神の民として恵みによって召集された群であることに理由があります。教会は自然発生的な集団ではありません。伝道によって伝えられ、召されて集う群です。それには、教会は自然発生的な集団ではなく、「契約の民」であるということが根本にあります。契約の民とは、「神の選び」に根拠をもち、神がその恵みのゆえに選び、選ばれた民の神となり、民も神の恵みに応えて自分たちの神として、信じ、従っていく、つまりその神に忠実でありつづけていくわけです。この契約の民は、血や大地といった自然的に決定された紐帯に従った民族共同体ではありません。神が恵みによって選び、召し集め、民はそれに応

えるのです。応えることは、信仰の決意的表明であり、信仰告白であり、洗礼がその加入のサクラメントです。従って生まれが自然的にどうであれ、選びと応答により、洗礼によって教会に加えられます。神の恵みがキリストの十字架の中に示されたとき、もはやユダヤ人もギリシャ人もない、自由人と奴隷の違いも、男と女の違いもないと言われました。新しい契約の民が神の選びに基づきながら、キリストの贖いによって回復されたとき、神の御計画に従って、異邦人もまた加えられたのです。そこで教会は、神の選びにあずかっている人々を神の民の中に加えて集めなければなりません。そういう契約の民として教会は本質的に伝道的なのです。それは神が伝道的、つまりご計画に従って民を集める方だからです。契約の民はその神に応答し、神の民を伝道によって集めなければならないわけです。神が伝道的であるゆえに、教会も伝道的です。「神に対応する」ことは契約の民の本質にあることです。

二、「使徒的教会」

教会の本質に伝道が備わっていることは、どのように表現されるでしょうか。教会の本質の表現としてニカイア信条は「一つにして、聖なる、公同の、使徒的教会」と

いう表現を掲げました。教会の本質を示す四つの規定です。教会は本質的に「一つ」と言われます。たとえ現象としての教会が表面で分裂しているとしても、教会は教会としての本質において「一つ」です。つまり本質的な教会、真実の教会は一つなのです。それはキリストが一人であるように、キリストの体は一つですし、教会を生かしている御霊も一つだからです。教会が信じ、そこに向きを取っている契約の神は唯一ひとりなる神ですから、その契約の民も一つの民です。この本質的な「一つ」に与ることで、現象的な分裂に耐え、その分裂のゆえに教会に望みを失うことがないようにしなければなりません。真の教会、教会の本質は、現象しか見えない経験的な理解によってではなく、神の恵みの事態を認識する信仰的霊的認識によって洞察するべきものです。

同じ様に教会は「聖なる教会」です。契約の民は、この世の力で作られたのではなく、神によって造られ、神のものです。それゆえ真の教会は「聖なる教会」です。また「公同の教会」です。真の教会は偏った一部の人々の教会ではありません。さらに教会は「使徒的教会」です。「使徒的な信仰」によって支えられ、それを継承する教会です。

一体、これら教会の本質の中で「伝道的教会」という本質はどこに表現されているでしょうか。それはそれぞれ四つの本質のどれにも関係していますが、とりわけ「使徒的教会」の中に表現されています。使徒たちは、「使徒的な使命」をもって、主の証人として「派遣」されました。彼らは、神との和解を受けなさいとのキリストの願いをキリストに代わって願うために、「和解のために奉仕する任務」を負っておりました。「使徒的教会」はこの任務を継承しています。その意味で教会は、本質的に、伝道のために世に遣わされている群なのです。

三、「真の教会の一致(じつじ)」

宗教改革以来の福音主義教会は、教会の真の一致として「二つのしるし」を挙げました。「福音を正しく教える」として福音に従って「正しく聖礼典を執行すること」です。この「真の教会の一致」のしるしとしてさらに「伝道する」ことを入れることはできないでしょうか。「福音を正しく教える」ことは「福音の正しい説教」や「純粋な教理」と結び合わされました。日本基督教団はこれを「福音を正しく宣べ伝え」と表現しています。「宣べ伝える」という表現は、正しい御言葉の説教や正しい教理

の教育とともに、伝道を含めた表現とも受け取れます。あるいはこれを区別して、真の教会の一致のしるしは、正しい福音の説教と教理、それに福音に従った正しい聖礼典の執行、そして第三に福音の伝道であると言ってもよいと思います。正しい福音の説教と聖礼典の執行は、正しい礼拝とも言い得るでしょう。そうすると、真の教会の一致のしるしは、福音による正しい礼拝と福音の正しい伝道とも言い得ると思うのです。伝道は教会の一致の第三のしるしと言ってもよいでしょう。

四、伝道するキリスト者を育む教会

① 信仰の訓練

教会の一致のしるしについては、ときには第三のしるしとして「信徒の訓練」(ディシプリン)を加える場合があります。その場合、従来、信徒の訓練として、モラルの上での信徒個人々々の正しい生活が考えられてきました。それが聖餐にあずかる条件とされ、それを指導するのが「牧会」と考えられたわけです。しかし第三のしるしとして「伝道」を加えますと、信徒の訓練の中で伝道が重大な位置を持ちます。信徒の訓練あるいは教会生活の訓練の中で「伝道のパイエティ」を涵養かんようすることが、個人的

なモラルの維持と並んで、あるいはそれに先立って重大な位置に立ちます。もちろんモラルはいらぬというわけではありません。福音を伝える証の修練は当然、モラルを含むでしょう。主の証人としての訓練といった場合にその中身は何かということです。伝道なきモラルでも、モラルなき伝道でもなく、真実に主のものとされた人の訓練が重大でしょう。

このことは「キリスト者とは誰か」という問題の理解とも関係します。「キリスト者」というのは一体、何者なのでしょう。どういう人間でしょうか。キリスト者は、「主のもの」とされて、聖霊によってキリストとの一体性の中に「召命」された人です。罪にもかかわらず「義」とされた人、つまり「義認」を受け、さらに「再生」の生命の中で主のものとして「聖化」されている人です。キリスト者は同時に「主のもの」、主の証人として「派遣」されてもいます。この世に派遣されていないキリスト者は誰一人いません。主のものとされたことは、主の証人とされたこと、そして主のもとにありつつ世の人々のもとへと派遣されていることを含んでいます。そう理解しますと、教会生活の訓練は、召され、義と認められ、再生させられ、聖化され、派遣された人々の訓練、修練、トレーニングを意味することになります。従ってそこに

は「伝道のパイエティ」つまり「伝道活動の中に表現される信仰心」の涵養も含まれているわけです。

② 「伝道のパイエティ」の涵養

以上のようなわけで、教会生活の信仰訓練の中に重要不可欠なものとして「伝道のパイエティ」を涵養するという課題があります。そうした信仰訓練の道は、どのように遂行されるでしょうか。そのためにまず牧師による「牧会」という課題があります。また牧会のために用いられるいくつかの手立てがあります。祈禱会や聖書研究会、そして証し会など各種の集会による信仰訓練があります。修養会は日本の教会ではそうした学びや訓練の重大な機会を提供してきました。もう一つ重要な手立てとして「文書」を通しての学びもあります。これにはまず「信仰問答」が教会史上大きな役割を果たしてきました。その上でさらに信仰と生活を教える諸文書、信仰指導書や敬虔のための文書、信仰の先人の伝記などの読書があります。ピューリタンたちはそうした文書を沢山生み出しています。例えばリチャード・バクスターの『キリスト教指針』をはじめとした種々の文書があります。牧師はそうした牧会や信仰の修練を助ける文書を自ら執筆する必要があります。

しかしその際、個々の牧師が記したもののまゝに共通の「信仰問答」が役割を果たすでしょう。諸教会を統合している教団は、通常、その教団の「信仰告白」と「教会憲法」を持っています。それによって「信仰と職制」(Faith and Order)を形成して、諸教会で語るべき信仰の言葉と教会の秩序や意志決定の道筋を確定しています。しかしそれだけでなく、その「信仰と職制」つまり福音理解と教会の形態に噛み合った仕方、「礼拝指針」(あるいは「礼拝式文」)を整えて、主の日の礼拝やその他の礼拝生活を支え、信仰生活の基本、敬虔の基盤を形成します。そしてその基盤の上で、ということとは「信仰告白」「教会憲法」「礼拝指針」と関連しつつ、「信仰問答」や「生活綱領」などを作成して、信徒の敬虔や生活を教え導きます。これらすべては教会の信仰として統一あるものでなければなりません。もちろんそうした教会や教団の一致があって、その上で個々の牧師たちや各教会の会衆の実情に合わせて、その他の信仰的文書があれば、それをも用いて豊かさを加えることができるでしょう。

こうして集会を通してだけでなく、諸文書を通して信仰訓練がなされるときにも、「伝道」が決定的な位置を占めていなくてはならないでしょう。そうでなければ教会の本質にも、またキリスト者の本質にも合致しないことになります。ですから、「信

「告白」も「教憲・教規」も、また「礼拝指針」も、そして「信仰問答」や「生活綱領」も伝道を本質的に位置付けているべきです。日本基督教団の実情を反省すると必ずしもこの点は明確に意識され、決意されてこなかったかも知れません。しかるべき改善が図られるべきでしょう。こうした基盤造りの上で、必要に応じて「伝道指針」や「伝道の手引き」のような文章を整えることも意味があると思われまます。諸集会での学びと共に、そうした文書により教会の伝道の活動が堅固にされるように、「伝道のパイエティ」が涵養されなければなりません。こうした学びは、終始、祈りを伴ってなされるべきことは言うまでもないと思います。「伝道のパイエティ」は祈りの修練と共に学ばれるのです。

そのとき、すでに洗礼を受けて、主のものとしてされたことの深い意味と喜びを理解し、再経験する必要があります。主の福音による救いを改めて理解し、キリストに結ばれて救われた者としての確信を堅固にします。その中で、すべての主にある兄弟姉妹とともに、「主の証し」と「福音の伝道」のために遣わされているとの自覚を与えられるわけです。それは神の民とされた契約の民の義務を再認識することでもありません。契約の民の神への応答の生活は、神の犠牲愛に基づいて、神の民の契約的な愛と

自由の中で生きられます。その中に伝道が位置しています。

こうした信仰生活の筋道は、祈りの経験と共に、信仰の事柄、その真理を理解することから始まります。福音の豊かさと主のものとしてされた恵みの大きさ、そして救われたという確信を得るとき、深い喜びが湧いてくるはずで、かけがえのないキリスト者の生活の喜びとともに、隣人に福音を伝える使命を覚えるはずで、信仰の真理の理解と深い喜びをもって、理解したことを意志的に受け入れ、すでに主の証人とされ、すでに伝道する者とされていることをしっかりと受け入れ、それを意志的に肯定するのです。

③ 聖餐における「伝道のパイエティ」の涵養

信仰訓練は、従来多くの場合、聖餐に与る準備と関連させながら行なわれてきました。「伝道のパイエティ」の涵養もその文脈でなされてよいと思われまます。さらに言えば「聖餐」にあずかることそのものの中で、「伝道のパイエティ」は養われるべきです。聖餐において主イエス・キリストの人格、その御業、そしてその約束にあずかります。聖餐において主イエスの十字架が想起され、現在化され、陪餐者は洗礼によって主に結ばれたものとして、キリストの十字架のもとで主の復活の命に与りま

す。また聖餐において、神の国の祝宴が主の贖いと約束のうちに先取りされています。陪餐者は主にあって一つにされて神の国の祝宴に希望の形で、主の約束を信頼する形であずかります。聖餐は、こうして主の十字架を受け、そうすることで神の国にあずかり、十字架から神の国へと歩み続ける旅路にある聖礼典です。ですから、神の恵みの選びにあずかったすべての神の民が神の国の祝宴にあずかるように、いま地上でこの聖餐に共に招かれることを願います。聖餐はそのために伝道の思いを熱くするときでもあります。自分もここに主のものとして招かれた、他の兄弟姉妹もここにあずかれるようにと願います。

日本基督教団「礼拝式文」では、聖餐の感謝の祈りの中で次のように祈ります。「あなたはこれによって、御子イエス・キリストのあがないの恵みをわたしたちのうちに確かめ、わたしたちの罪をゆるし、汚れをきよめ、とこしえの命を与え、み国の世嗣としての望みを堅くしてくださいました。いま、聖霊の助けにより、感謝をもって、このからだを生きた聖なる供え物としてみ前にささげます。わたしたち、主のからだのえだである自覚がいよいよ深くなり、ますます励んで主に仕えることができますように。また、キリストの復活の力を知り、その苦しみにあずかり、おりを得ても

得なくても、みことばを宣べ伝えることができますように」。聖餐は伝道する者とされていることをキリスト者としての存在の深みから理解し、改めて献身するときでもあります。

II

伝道のための黙想 (二)

「神の一ムナの力」

(ルカによる福音書一九章一六節)

主イエスの地上での最後が近づき、一行がいよいよエルサレムに近づいた時、主の周りには緊迫した空気が漂いました。人々は、主イエスが王であるメシアとしてエルサレムに入場し、「神の国はすぐにも現われると思っていたから」でした。そのとき主イエスは一つの「譬え」を語られ、御自分がエルサレムに入場したとき、ただちに王座につき、たちまち神の国がまったき仕方であるのではない、と話されました。そうではなく、まず主は「遠い国へ旅立ち」、それからやがて「王の位を受けて帰ってくる」(一五節)と言われたのです。主の僕たちは、すぐに神の国の到来に立ち会う

のではなく、しばらく主の留守の状態を経験するというのです。そして主イエスが言われたことは、この間に、与えられた資金をもとでに商売をする話でした。つまり、主イエスが十字架におかかりになり、それから神の国がまったき仕方であるまです、その間、主の弟子たちがどう生きるべきかをお語りになったわけです。

この譬えにはまた、その国の国民は、彼、つまり王の位に就いてもどってくるその主人を「憎んでいた」とも言われています。主人の僕としては、その主人が国民から憎まれている状態の中で、主人のために商売をするのですから、決して容易ではなく、大変に不利な状態であったわけです。それは、主イエスが十字架にかけられた後の主の弟子たちの状態をよく表していますし、私たち日本において主イエスの弟子とされた者たちが、御国の到来を前にして日々を生きている現実ともよく合致していると思います。神の国の到来を待ち望んで生きることが、何もしないで無為に時を過ごすのではなく、主を歓迎しようとする国民の間であっても、主から受けた資金をもとに商売に励むこととして描かれているわけです。

これと同じような設定で語られた譬え話として、マタイ福音書二五章に伝えられている「タラントンの譬え」があります。それは最後の晩餐の直前に主イエスが「天の

「国」の譬え話の一つとして語られたと言われます。忠実なよい僕のあり方が、それぞれに与えられたタラントンに対し、「少しのものにも忠実である」ように描かれているわけです。これら二つの譬え話しの違いを言うと、ルカによる福音書の話しにできます。「ムナ」は、「タラントン」よりもはるかに小額のお金です。そして「タラントン」の方は、それぞれに人によって任される金額が異なっています。ある者には五タラントン、ある者には二タラントン、ある者には一タラントンが預けられます。私たちの信仰生活にもそういう人によって異なる賜物を預けられつつ、信仰生活を忠実に生きる課題が与えられている場合があるでしょう。しかしそれとは違って、ルカによる福音書の譬え話しでは、一〇人の僕全体に一〇ムナが渡され、それで一人一人は等しく一ムナずつ託されたとなっています。信仰生活にはそれぞれ人によって違う賜物という面と共に、神の民が全員として託され、また一人一人としても等しく同じものが託されているという面があるわけです。それでは主の民の全員に託され、そして一人一人に共通して同じものが託されている賜物とは何でしょうか。個人個人で異なる個性とか、環境や能力、それぞれの特徴ではなく、共通に託されている賜物とは何でしょうか。それは聖霊とその賜物とも理解できませんが、また神の言葉、神の福音

と理解することもできるのではないのでしょうか。神の言葉が「ゆだねられています」ということは、聖書の他の箇所にも見られる理解です。そしてこの譬えでは、ごく小さなことに忠実である生き方として、「あなたの一ムナで十ムナをもうけました」という答えが語られます。

ここに「あなたの一ムナで」と訳されているのは、文字通りには「あなたの一ムナが」とある文章です。神の一ムナが主語なのです。神の一ムナは力をもって十ムナをもうけているというのです。ですから、ごく小さなことに忠実であることは、ここでは神の御言葉の力に信頼し、失敗を恐れず、神の御言葉そのものがその力を発揮されるようにしていることです。

二〇〇九年に、日本のプロテスタント教会は、プロテスタント伝道一五〇年を迎えます。いま大事なことは、何でしょうか。先に記しましたように「開教五〇周年記念」の時、植村正久はその講演の中で「牧師自身が信仰厚いものとなること」だと言いました。「牧師自身が信仰厚いものになる」とはどういうことでしょうか。この御言葉で言いますと、ごく小さなことにも忠実になって、神の一ムナがもっている力に信頼することです。神の御言葉の力に信頼し、それが力を奮う場所になることです。

そういう伝道者、そして信徒たちが必要です。キリスト者一人一人、そして教会がこぞって「信仰厚いもの」にされて、「神の一ムナ」が持っている力を信頼することです。日本伝道はこれからです。神の一ムナそのものが力を発揮します。神の御言葉、神の福音がそれ自体力を持っているということは、日本から神の御言葉が消えることではない、伝道がなくなり、キリスト教信仰が消えることではないということです。蒔かれた御言葉はそれ自体十ムナになる力もっています。それを布に包んでしまうのではなく、外に出すことです。信仰厚きものにされて、神の一ムナが十ムナをもうける目撃証人になることです。

第三章 現代に福音を伝える

日本にプロテスタント・キリスト教の福音伝道が開始して、ほぼ一五〇年が経過しようとしています。今日、各教会において伝道は決して容易なことではなく、教会学校の生徒数の減少とか、教会員の高齢化とか、いろいろな伝道の課題が自覚されています。しかし他方で、伝道の必要が切実に認識され、伝道に向かう意気込みのようなものがどの教会にも感じられるようになってきました。ここでは、そうした日本の教会の現状を踏まえて、私たちが天に国籍を持つものとして遣わされているこの時代や世界を考え、現代の伝道の問題を特に三つの点にしばってお話したいと思います。

第一に「この時代に福音を伝える」という観点から、現代という時代や社会の問題、そこに福音を伝える意味や可能性についてお話し、第二に教会と私たちキリスト者の伝道の働きに際して、根本になければならないことについてお話ししたいと思います

す。そして最後に、伝道は教会の中に新しく人を迎えることですが、その「伝道する教会」についてもお話ししたいと思います。

一、現代に福音を伝える

現代の人間の問題はどうか理解されるでしょうか。現代の世界は金融や経済だけでなく、政治、法、文化など重複したさまざまなレベルでグローバル化した世界と言われます。しかも、グローバル化した世界として共通なものに結ばれながら、同時に随所で深く「分裂」し、「衝突」や「対立」によって引き裂かれ、傷つけあってもいる現実があります。文明の「衝突」や民族の「対立」に悩まされています。それだけでなく「個人の対立」「競争や利害の対立」が大きくなり、「格差社会」などとも言われまます。宗教もまた、そうした対立要因の一つと見なされています。つまり、人々は現代の分裂や対立の中で「宗教の問題解決能力」に信頼を寄せることができないでいるわけです。

宗教の問題解決能力を信頼できないということは、現代の一つの特徴、きわめて問題的特徴を引き起こしています。それは、現代人が多く、世俗主義に陥り、感覚主義的になって、現世的な現実を超えた意味や救済の神的現実を信じられず、生きがいを持つにしても刹那的になり、虚無主義の傾向を強めているという事実です。この傾向はすでに一八世紀に萌芽があり、一九世紀には思想や文学の主題とされ、二〇世紀を経るうちに一般の生活の中に入ってきたものです。しかし世俗主義、感覚主義、刹那主義、虚無主義では、人生や世界の意味も存在理由もつかめません。救いがあるかないかわけです。人間の尊厳も命の尊さも、道徳の根拠も確固とした仕方で確信することができません。人生の意味や命の尊さを理解するためには、どうしても感覚的な現実を超えて、意味や尊厳の源である超越的な源泉に触れなければならないでしょう。しかしそれはまさしく信仰の問題であり、宗教の課題なのです。

従って現代の人間は、民族的な対立や分裂の一つの要因をなす宗教ではなくて、民族主義的な文明を越えて、また感覚主義的な生きかたを越えて、現代の「分裂」や「対立」を癒し、人と人とを結び合わせ、平和と一致を生み出し、生の意味を与え、道徳の基盤ともなる宗教を必要としています。また人間は生の超越的な源と結ばれるとき、それによってはじめて命の尊厳を示され、人生の意味を受け取ることができません。しかもただ動植物の命も人間の命も一連のものとして見る「命の流れ」とかでな

くて、人間の命を他ならぬかけがえのない人間の命として、他の生命とは区別して理解し、その尊さを伝える超越的な起源との結びつきが必要とされています。しかもそこから他の命の意味も理解できるのでなければなりません。現代人はその意味で、もう一度、そうした問題解決能力を発揮できる真の世界宗教を求めていると言ってよいでしょう。世俗主義の無能力を擬似宗教や低次元の宗教、例えば占いか呪いとかによって補うことは不可能でしょう。また、宗教が、どうしても民族的、あるいは地域的な色彩から離れられず、人間の利害を代表するイデオロギー的性格を脱却できない場合がありますが、その宗教も解決にはなりません。端的に言って、現代人はもっと真実の神の解決能力に心向け直さなければならぬでしょう。現代世界の中で、また将来をも展望しながら、絶望に陥るべきでないとすれば、最後に残された希望の可能性は「真実の神の再発見」以外にはないのでしょうか。

日本社会にも「分裂」や「対立」の問題があります。人々は共同体の崩壊や過激な競争主義の中で互いに孤立し、人と人との結びつきは希薄になり、あらゆる共同体や集団が信用のできないものになっています。地縁や血縁の古い共同体はとくに廃れ、戦後、国家に代わって人々の忠誠心の対象になった「企業」や「会社」も、今や

終身雇用制を投げ捨て、誰にとっても最後まで当てにすることのできるものでないことが赤裸々になりました。家族の紐帯さえもひどく希薄化し、家族道徳や倫理も崩れかかっています。性や結婚の倫理は、この二、三十年でひどく変化しました。人生の基盤が揺れ動いているからです。一部の人々は再び「愛郷心」と「愛国心」に訴えようとしています。しかしもはや古い「郷土」も、そこに忠誠心を傾けて、そのために生きかつ死ぬことのできる「国家」もあるわけではありません。そもそもそうした古い「郷土」や「国家」に忠誠心を懸けたのが誤りであったという反省が、十分なされてこなかったことが、今日の日本社会の問題を生み出している一因にもなっています。それでは私たちは、一体どこに忠誠心を傾け、どこに命をかけ、どこで死んだらよいのでしょうか。命をどこにつなぎ、心をどこに結んだらよいのでしょうか。日本社会の精神の根底にはこの忠誠心問題という深い問題が横たわっています。これも真実の神以外に答えを与えることはできないでしょう。私たちは命や心をどこに結び合わせるのでしょうか。私たちの信頼の相手として真実の神を見出すことが決定的に重大です。神に心を結ぶことで、人と人とが互いに結ばれる、そうした真実の神を見出すことが、現代の世界の大きな課題だと思われれます。

もしそのように言うことができるのであれば、「イエス・キリストの福音」は現代人に対して有力なメッセージを伝えています。それは、神が「分裂」や「対立」を克服し、そのためにご自身犠牲を払い、それによって私たちをご自身に結び合わせ、また他のものたちとも結び合わせてくださっているという福音です。神はイエス・キリストの出来事を通して、私たちをまず神ご自身に結び合わせてくださいました。私たちがキリストのものとしてくださり、それによって神の子たちとし、神の民に加えてくださいました。神の子たちとすることで、私たちが相互にも結び合わせてくださったのです。神は、私たちを愛し、憐れみ、それゆえに御子キリストの犠牲、神ご自身の犠牲を払って、確かな根拠によって救いに入れてくださいました。私たちの人生も、そして命も、奥深い意味と尊厳をそこから与えられています。人間は何の根拠も正当性も持たない闇行為のような偶然の処置によって救われることはできません。神は、人間の分裂や対立をキリストの業を通して堂々と克服し、ご自身に結び合わせることを通して、明白な根拠を持って人と人を一つの新しい神の民の中に結び合わせてくださったのです。このイエス・キリストの福音を現代の問題に浸透する新しい言葉によって深く言い表さなければなりません。現代の問題の解決になる福音を言い表す

「表現力」を私たちは必要としています。

二、伝道の根本になければならぬ二つのこと

——「救いの確かさ」と「伝道の不可欠性の確信」——

キリストの福音を告げる新しい表現力を求めつつ、宣べ伝えていくとき、根本になければならないことがあります。その一つは、福音を伝える人自身がキリストを信じ、キリストに結ばれることで「救い」に入れられていることを確信していることです。これは言うまでもないことですが、誰も自分が信じていないことを宣べ伝えることはできないでしょう。伝道がなかなかできないのは、自分たち自身が明確に信じていないからだとも言えます。「救いの確かさ」の確信がなくては、伝道の熱心は湧きません。もちろん「救いの完成」は主の約束にかかっており、その完全な成就是将来のことです。そこで「自分の体を打ちたたいて服従させます。それは他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです」（コリント一、九・二七）と言われる面があります。私たちは誰もが信仰の弱い者であり、「信仰の薄いものよ、なぜ疑ったのか」と言われる者です。ペトロもまたあの嵐の湖の上で信仰の

薄い者でした。しかしそのペトロを主イエスは「すぐに手を伸ばして捕まえて」（マタイ一四・三一）くださったのです。私たち自身の信仰は薄く弱いけれども、しかし「主の手に捕えられている確かさ」を知ることができます。主のものとされ、神との和解に入れられ、神の民の中に加えられ、救いに入れられている。そのことを信じて、「救いの確かさ」を与えられ、「救いに入れられている素晴らしさ」を知ることができます。「救いに入れられている素晴らしさ」を知るとは、「いま、共にいますキリスト」との交わりに基づいています。私たちの救いのためにご自身を犠牲にされたキリストが、復活し、高く挙げられ、神と一つであり、神であるということ、それゆえ私たちと共に今日も生きてくださっています。このキリストの「臨在」が、私たちに「救いの確かさ」を与え、「救いに入れられた喜び」を知らせ、「感謝」を引きおこします。それが、伝道に派遣される喜びの根本にあることです。「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ二八・二〇）との主の約束は、この「臨在のキリスト」を伝えて、伝道の派遣になくはならない根本の確信をもたらします。

伝道する者にされたことは、主の弟子とされ、主を証するものとされたことで、私たちはそれを喜び、感謝して伝道します。誰も感謝も喜びもなく伝道のために駆け出

すことはできません。主の弟子とされて、主の御そばにおかれていなくては、伝道に派遣されません。伝道は根本的には、決して「伝道の危機意識」から、あるいは自分がしなくて誰がするといった類の「英雄主義の自己意識」から、あるいは「一人が何人に」といったノルマ意識や課題意識から出てくるものではありません。神はご自身伝道を推進されるお方ですから、私たちのそうした危機感情や英雄意識を必要とはされないでしょう。むしろ感謝と喜びから、ということとは信仰生活の発露として、キリストのものとされた幸いに生かされている当然の結果として、伝道に用いられます。私たちがなすべきことは、むしろ主のものとされた確かさ、「救いの確かさ」、「救われたものの素晴らしさ」をしっかりと心に知り、主に捉えられたことを感謝することです。自分がキリスト者とされたことの素晴らしさをはっきりと知ることです。主に捉えられて、生まれ変わらされた者であり、共にいてくださる主の御手に捕えられて「救いの確かさ」を確信させていただくことです。そこから伝道への献身が生まれるでしょう。それにはキリストが誰であり、いまどこにおられるかを知っていることが重要なことです。主は御子にいます神であり、伝道する私たちと共にいてくださいます。この共にいますキリストを私たちはその「御言葉」によって知らされます。御言

葉による霊的な信仰によって知らされます。また聖礼典によって、御言葉だけではもう一つ違った仕方です。聖礼典的に知らされます。洗礼によって主のものとされています。そして聖餐によって主とその御業を私たち自身に獲得することがゆるされています。これに与りつつ、救いに入れられたことを確信します。このことは私たちの献身の根拠になります。

主の福音の伝道にあたって、もう一つ重要なことは「伝道の不可欠性」を知ることでしょう。伝道は、してもしなくてもよいものではありません。あってもなくてもよいものではありません。伝道は、礼拝がそうであるように、主を信じるのがそうであるように、信仰生活に欠けてはならないことです。伝道が不可欠ということは、教会が存続していくために、教会経営的に不可欠というわけではありません。それはまた、神が神でいらっしゃるためにはどうしても伝道が必要というのでもありません。そうではなく、神はその自由なご意志により、愛の意志決定をされて、人々が伝道によって救いに入れられることを意志されました。十字架上に流された主イエス・キリストの血とその苦しみ、そしてその死によって、根拠ある仕方です。救いの業をなさった神は、その十字架の業が「十字架の言葉」として宣べ伝えられることを意志されました。

た。それを救いのご計画の中の不可欠なこととして位置づけられたのです。伝道は神の恵みによる救いのご計画の中で不可欠なものとされています。そこに神の恵みの意志が働いています。主イエスの十字架そのものによって救いのことは一切合財全部済ませて、あとはただ神の国がくるだけにしたというではありません。主の十字架の恵みを信じて、私たちが神の子とされ、さらに神がなお選んでおられる神の民を主の周りに集める働きに用いてくださいます。神は人間の応答や献身を無視して救済史を終わらせることをなさらないのです。聖霊を注いで、私たちが神の恵みに応答するのを受け入れてくださいます。神はその救いのご計画によって、主の贖いを通して罪の人間をご自分の民とし、ご自分との和解の中に集めることを決心され、そのために御子は十字架にかかりました。しかしそれだけでなく、聖霊を派遣し、主の弟子たちを用いて伝道を通して主の周りに教会を集め、また教会を世に派遣して、神の民を集めさせておられます。十字架の出来事が十字架の言葉として伝えられることを、またキリストの体と血とが聖餐を通して伝えられることを意志し、約束しておられます。神は人間を強制的に救済して終わるのでなく、私たちが神の救いの業を信じて、告白し、感謝し、神に応答することを求め、その応答を受け入れてくださいます。神は

交わりの神、契約の神なのです。それゆえ、全能の神は、私たちが信じ、応答するのを待って、受け入れてくださる忍耐の神でもあります。ですから、伝道はしてもしなくてもよいものではなく、しなければならぬことです。心から神を信じ、救いに入られたことを感謝し、御名をたたえる人が、伝道に用いられること、それが神のご計画です。ですから伝道しない、伝道に用いられないキリスト者というのは、あり得ないものです。

三、伝道する教会

—— 神の契約共同体 ——

「救いの確かさ」と「伝道の不可欠な使命」は教会生活の中に形をとって現されま
す。教会は、キリストの周りに集められ、「共にいてくださるキリスト」によって
「救いの確かさ」に生かされ、また「主に従う」ことによって「伝道に派遣されてい
る群」です。私たちは教会生活の中で、「救いの確かさ」の根拠である「いま、共に
いますキリスト」に聖霊による信仰により、御言葉により、また聖礼典によって結ば
れています。そしてキリストとその御業を伝える伝道の使命に生かされています。神

は教会をキリストの周りに集めてくださり、そして「救いの確かさ」と「伝道の使
命」に生きることができるようになってくださったのです。

神が結びあわせてくださることを「神の聖なる契約」と言います。神が私たちの神
でいてくださり、私たちが神の民であり続ける聖なる契約です。神はキリストの御業
を通し、また聖霊の働きによって私たちをご自身に結び合わせ、私たち主のものとし
られた者たちを相互にも結び合わせてくださいました。神によって神ご自身に結び合わ
され、また主にある兄弟姉妹とも結び合わされるとき、私たちには生きる喜びと力が
湧いてきます。教会はそうした神による結合が、群の形、共同体の姿をとっているこ
ろです。

古来、契約を結ぶときは、契約当事者は、その契約を破ったときには引き裂かれ殺
されてよいという意味で、二つに引き裂かれたいけにえの間を歩んだと言われます。
しかしイスラエルの民は契約を繰り返し破り、ただ神のみが契約に対する真実、憐れ
みと慈しみの愛を貫かれました。イエス・キリストが十字架に血を流されたのは、契
約の犠牲となって、契約破りの罪を贖い、不真実な人間を赦し、和解の中に入れ、
「新しい契約」を樹立するためです。教会はキリストの犠牲によって建てられ、神

がご自身に結び合わせ、私たち相互にも結び合わせてくださった「契約共同体」(covenantal community)です。教会は、地縁や血縁による排他的、独善的な民族主義的集団ではありません。神の選びと犠牲によって、神の愛の福音によって一つにされた民です。契約の共同体は、神と結ばれ、成員相互と結ばれているだけでなく、あらゆる民の祝福の基となる約束を受けています。それは、神の民をさらに仲間に加える、開かれた共同体、人々を迎え入れ、神の前に一つの約束に入る共同体、そして他のさまざまな集団の祝福の基になる執り成しの共同体です。教会は、「救いの確かさ」に生かされ、「伝道の不可欠な使命」に生きる群です。

教会はまた、キリストの犠牲によって贖いとられた聖なる契約の共同体として、あらゆる人間集団の模範でもあるはずです。家族やその他の共同体、とりわけそこに愛の犠牲がなければならぬ共同体は、教会を模範とし、あるいは教会に結びつくことによってそれ自体の意味と成立の力を与えられるでしょう。家族の絆が希薄になっていると言われます。教会は神の御前で、その犠牲によって結び合わされた群として、家族の絆が回復する支えでなければなりません。家族は教会に加えられることによって、繰り返し主イエスの十字架の下に立つことができ、それによって真実の契

約関係に近づくことができるでしょう。高齢者社会と言われ、高齢者介護が重大な問題になっていきます。教会の中にそれを慰め、その支えとなる精神があるはずです。キリストの犠牲の愛によって、人間の共同体能力を回復させる愛の命がそこに働いているはずです。私たちは礼拝のたびごとに十字架にかかれた主の前に立って、主の憐れみの力によって慰められ、その永遠の命に与かり、他者を愛するものとされます。

教育や介護、その他、愛の犠牲が求められ、共同体形成の力が問われるとき、教会の中で、主イエスの周りで、神の共同体形成的な恵みの力に捉えられ、慰められ、支えられることができます。グローバル化した世界に不可欠な世界共通文明、世界共通価値の精神的エートスは、少なくとも一つの重大な源泉を教会の中に、主イエスの十字架の下に見出すでしょう。互いに助け合う力が教会から湧くはずで、グローバルな社会的デモクラシー、グローバルな自由市民社会、法の支配、人権とデモクラティックな政治、宗教的寛容、生命の尊厳、平和な国際秩序と環境の保全、そしてさまざまな形での相互援助、知的な隣人愛と知的愛敵、そうしたグローバルな共通価値を支える精神が養われるところとして、教会はまさに現代世界に有意義な、極めて有意義な世界宗教を具体的に示しているのではないのでしょうか。

III

伝道のための黙想 (三)

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」

(マタイによる福音書一四章三一節)

教会の歩みも、伝道の歩みも、決して常に順調であるわけではありません。弟子たちを乗せた舟が逆風の中に立ち尽くし、伝道の道が前進不能に陥ることもないわけではありません。マタイ福音書が伝える嵐に翻弄され「逆風のために波に悩まされ」た弟子たちの姿は、伝道の難路に行き悩む私たち自身の姿でもあります。荒れ狂う水は、聖書の人々にとっては神の創造の力に敵対する「破壊的な力」を意味しました。命を脅かす破壊的な力です。現代人も世界や人生の経験の中で、そうした破壊的な力に悩まされます。信仰生活も、そして伝道する信仰者の現実もそうした経験と無関係

ではありません。

しかし聖書は逆風に悩まされる弟子たちのもとに主イエスが来られると語っています。嵐の夜の中で助けにこられる主イエスを発見する信仰が問われている、ということです。主はひとり山で祈っておられました。その祈りの内容は、聖書には書かれていません。しかし主が祈るところ、神の救いの御計画が進みます。主イエスは人類の救いのため、そして私たち一人ひとりの救いのために祈ってくださいます。そのことは、もうすでに神の大きな慰めです。主は、祈りの中ですでに助けてくださいます。ですからこそ、主イエスは助けに来てくださいます。「夜が明けるころ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた」。このイエスによって、逆風に会うことは、助けに来られる主イエスとお会いするチャンスになります。伝道の難路で、助けに来られる主にお会いすることができます。主とお会いする以外の方法で、嵐に立ち尽くす教会と伝道の道が開けると考えるべきではありません。

ところが、弟子たちは、すぐに主イエスと分かりませんでした。主イエスは今日も、私たちと共にいてくださり、私たちを支え、助けてくださいます。しかしそれが私たちには簡単に分からないのです。どうしたら分かるでしょうか。主イエスは言葉

をかけられました。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」。この言葉を私たちは、主の言葉として、私たちに対する主の言葉として聞かなければなりません。波と嵐と夜の中で主の御言葉を聞いて、主イエスが共にいてくださることに気づかせていただく、それが信仰です。

主イエスが共にいてくださることに気づくとき、なお嵐は荒れ狂い、前進することはできませんが、しかしその嵐から自由にされます。自分の弱さを抱えながらも、水の上に踏み出すことができます。そうマタイ福音書は伝えます。伝道は水の上に踏み出すこととして可能になります。

ペトロが溺れかけたのは「信仰が薄くて、疑ったから」と言われます。水の上を歩くのは不可能なことと言うべきでしょう。しかし、主イエスは「来なさい」と言われます。マタイ福音書が語る信仰は猛烈です。「からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かってここからあそこへ移れと命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない」(一七・二〇)とも言われます。また、「この山に向かい、立ち上がって海に飛び込めと言っても、そのとおりになる。信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる」(二一・二二)。それが主の言葉を信じて、福音を伝える信

仰、伝道する信仰です。「水の上をあるいてそちらに行かせてください。」「来なさい」。主イエスを信頼することで、主イエスとともに大きな経験をするということです。

ペトロは水の上に踏み出しました。しかし信仰が薄く、溺れかけました。「信仰の薄い者よ」と言われます。ペトロの信仰は、なぜ「薄い信仰」だったのでしょうか。

「強い風に気がついて怖くなった」。「薄い信仰」は、主イエスに信頼するより、それ以外の脅威に怯えてしまいます。当然、自分の無力を感じてしまいます。信仰の本質は、主イエス・キリストに信頼すること、御言葉に信頼し、主のそばに身をおくことです。そして自分の無力を忘れてしまうことです。ふと気がつくとき水の上を歩いてきたということがあります。主イエスへの信頼が水の上を越えさせます。それが信仰の歩みであり、教会の歩みです。後から振り返ってみて越えてきた水のはばの大きさに驚かされることがあるのです。奇跡の歩みだったと思われれます。キリスト者の証の人生にも、そして教会の伝道の歩みにも、この奇跡があります。あるのが教会の伝道ではないでしょうか。石橋を叩いても渡らない仕方、伝道はできません。主を信じて水の上を歩く奇蹟が、伝道の道です。私たちも、踏み出す前に嵐を恐れ、自分の無力のために怯えるのではなく、山を動かす信仰をもって主を信じて進みたいと思います。

しかしその信仰にはとてもついていけないと思う気持ちも生じるのではないでしょうか。私はとても信仰の英雄ではない。むしろ「信仰の薄い者よ」と主から叱られる者の一人にすぎない。そう思われます。私もまたペトロと共に「強い風に気がついて怖くなり、沈みかける」に違いない。「主よ、助けてください」と叫ぶ者の一人です。それではいけないでしょうか。いや、主イエスはそれをよしとしてくださいます。「すぐ手を伸ばして捕まえて」くださいます。そしてなぜ「疑ったのか」とたしなめて下さいます。たしなめてくださるのは、まず捕まえて下さることによってです。赦しておられるからです。

教会の中に信仰の薄い人、疑う人がいてはいけないでしょうか。マタイ福音書が言うような山をも動かすような信仰でなければ伝道はできないのでしょうか。伝道の足を引っばるものは、伝道すべきではないのでしょうか。いや、その人もいてよいのです。ペトロ自身、信仰の薄い人、疑う人でした。教会の誰もが実はそうなのではないのでしょうか。信仰薄く、疑う人がいてよいのが教会の伝道です。主イエスが赦しておられるからです。その人を主が特別に赦しをもって捉えてくださるからです。マタイ福音書は山をも移す信仰について語りながら、その最期の「伝道の大命令」を伝

える箇所です。「疑う者もいた」(二八・一七)と伝えていきます。「疑う者」もいた弟子たちに向かって、主イエスは伝道のご命令をお与えになりました。「すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らにバプテスマを授けなさい」と。そして「わたしは世のおわりまで、いつもあなたがたと共にいる」と約束されたのです。「疑う者」も伝道する群の中に加えられています。共に伝道するのです。主イエスは疑う者を受け入れ、御手を伸ばして捉え、その疑いをゆるしつつ、そしてたしなめ、その疑いを克服してくださいます。愛と力のこもった御手を伸ばして、今日も主は私たちを捉まえ、そして福音を伝えよと言われます。主のお言葉に応えて、従っていききたいと思いません。

第四章 伝道の喜びに生きる

伝道することはキリスト者とされ、主の救いに入れられた者としての当然の営みですが、それは信仰の喜びに属することであることをお話したいと思います。

一、救いを求めている現代世界

現代は一体、どういう時代でしょうか。科学技術が発達し、あらゆる分野で国際化が進んできた時代です。それだけにまた、異なる文明が衝突している時代とも言われます。一つの社会の中に、さまざまな生き残りのための競争やストレスのある時代、そして人々がストレスに耐えにくくなっている時代でもあります。現代人は昔の故郷や共同社会を失っています。見知らぬ人々の間に生きています。人と人との結びつきは希薄で、それだけに例えば、犯罪が多発し、しかも犯罪検挙率は著しく低下している

とも言われます。一言で言って、現代の社会には平安や確かさがなく、魂の安らぎも失われています。現代は、救いを必要としている時代です。個人の生活にも世界全体にも「平安」と「救い」が与えられなければなりません。キリスト教会が「魂の慰め」の福音と「神の国の平和」の福音を伝えなければならぬ時代ではないでしょうか。現代こそ、教会が伝道の熱心を回復し、神の国の平和のために用いられるべきときです。

日本の伝道はなかなか容易でないという面もあります。これにも色々な理由が挙げられるでしょう。しかし誰もがみな、救いを必要としていることは明らかではないでしょうか。昔の故郷や共同社会にもどることはできません。もしできたとしてもかつての故郷と共同社会に救いがあったわけでもありません。あの時代には現代人のおよそ耐えられない抑圧や非人間性が渦巻いていました。そこで、私たち自身がまず、世の人々のために祈り、伝道に用いられ、神の国のために仕えさせていただかなければならないと思われれます。

二、主イエスの伝道、神の伝道

伝道のことを学ぶとき、決定的なことは、主イエスご自身が伝道されたということではないでしょうか。主イエスが伝道しなかったのであれば、話しは随分違ってくるでしょう。しかし、主は言われました。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ一・一五)。主はそう語って、弟子たちを集め、みそばに置かれ、さらに派遣して福音を伝えさせました。それは神の民を集め、神との平和にもたらし、神の国の到来に備えさせたのです。そのためにまた主は、罪の赦しを与え、失われた羊を取り戻されました。ですから、主に従うことは、先立って神の国の福音を伝える主に従い、共に伝道することなのです。主が十字架におかかりになったのも、この「神の国の福音」を伝えることと関係があります。主イエスの十字架による死は、神から離反した人間の罪を贖い、神の民に加えるためでした。「多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」(マルコ一四・二四)という御言葉も主イエスの十字架上の死が「契約の回復」のためであることを示しています。十字架は契約の回復、和解、神の平和の回復のためです。

主イエスの伝道は「神ご自身の伝道」を表しています。神ご自身の決意と救いの御計画があって、主イエスは来られ、また聖霊も派遣されました。聖書が伝えている三位一体の神は救済史の神であり、伝道する神です。神は天と地を創造し、そして御子を十字架に遣わすとともに、聖霊を注ぎ、御子と御霊によって、弟子たちを起こし、神の国の到来に先立って伝道させました。伝道は神の永遠の意志決定、救いのご計画の中に決意されています。神は福音を信じ、神に応答する民を求めてくださっています。現代の人々にとっても「救い」は神の契約の中に入れられることです。契約とは何ものによっても破られることのない神の愛による交わりです。「これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命の限りかたく節操を守る」、結婚式に言われるこの聖なる誓約は、神との契約関係が土台になっています。神との契約の交わりの中に真の平安があります。

三、神の喜びに参与する

失われた民が神の民の交わりの中に回復されることは、神ご自身の大きな喜びであると、主イエスは語られました。失われた一匹の羊の回復、失われた一枚の銀貨の発見、それは神の民が一人も欠けることなく、全員がそろそろうことを意味します。そのと

き天上に喜びが湧き起こります。そのために主イエスは派遣され、十字架にかかられました。そして復活し、天に挙げられて、全ての民への伝道を命じられたのです。聖霊もまたそのために注がれました。教会とキリスト者は伝道に用いられ、神のこの大きな喜びに一緒にあずかることがゆるされています。神の喜びにあずかることが、伝道の喜びです。一人の人が洗礼を受けるとき、神の子とされ、神の契約の中に加えられます。そのとき御子キリストの十字架での贖いが実を結んだのです。喜びが湧き起こるのは当然です。わたしたちもその喜びにあずかります。

四、伝道する教会

教会は、神が選び、主イエス・キリストにあって、聖霊によって集めてくださった神の民です。神が契約の神、人と共にあり、平和の中に入れてくださる神、招く神ですから、神の民は共に招く民、つまり伝道する民とされます。教会はまた「キリストの体」と言われます。頭であるキリストに洗礼を通して結ばれ、主のものとされた人々の集いです。頭である主が伝道され、また弟子を伝道のために派遣されるのですから、「キリストの体」である教会は、伝道する主の体です。伝道は教会の本質です。

伝道することを欠いて、教会は真に教会であることはできません。教会が「聖霊の宮」といわれる場合も同様です。聖霊は命の霊ですが、また人間にとっては信仰を与え、神との交わりに入れることで、生かしてくださる霊です。ですから命の霊である聖霊は、同時に「伝道の霊」でもあります。聖霊は命の息吹であるとともに、ミッシヨナリー・スピリットです。聖霊は、主イエスの伝道と共に働き、主の復活と昇天の後、主の民に注がれて伝道の力となりました。聖霊によらなければ、誰もイエスは主であり、キリストであり、神の御子であると信じ告白することはできません。聖霊は信仰を与え、また信仰を伝える神の力です。聖霊を受けたとき、異邦人伝道、世界伝道が開始されたのです。聖霊の宮である教会は、祈り、礼拝する宮ですが、同時に「伝道する宮」です。教会に聖霊が注がれ、聖霊が満ちるとき、万里の波頭を乗り越えて、見知らぬ異国の地にも福音を伝える力が与えられます。

教会の本質を言い表す表現に、「一つなる、聖なる、公同の、使徒的教会」という表現が取られます。このすべての表現が伝道に関係しています。中でもとりわけ「使徒的教会」は伝道する教会の本質を言い表しています。使徒的な信仰の教会、使徒的文書としての新約聖書、そして使徒的な信仰告白に立つ教会は、同時に「使徒的な使

命」「使徒的な召命」に生きるはずです。「使徒」とは「遣わされたもの」であって、それは主イエスの復活の証人として、主イエス・キリストの福音を宣べ伝え、すべての民を主の弟子とし、神の国の到来に備えるために派遣された人です。教会は「使徒的教会」としてこの使徒的使命を継承しています。

初代教会は、伝道する教会を具体的に実現していました。その後の教会もそうです。しかし時代によっては教会の伝道が内向きになって「内部での信仰継承」だけになった時代もあります。しかし一九世紀、「プロテスタント世界大伝道」が起こりました。宣教師たちが太平洋を越えて、すべてを投げ打って異郷の地に、ときには家族の命がけの犠牲も伴いながらやってきました。アジアの各地に福音が伝えられました。日本の教会もそのようにして始まり、日本人伝道者と信徒の伝道が始まり、まもなく伝道一五〇年を迎えようとしています。そして今では日本の教会による日本伝道によって世界伝道の一翼を担わなければなりません。海外からの宣教師による世界伝道から、それぞれの地域の教会による世界伝道へという、世界大伝道第二期の形態になっているわけです。

内部での信仰の継承も重大です。同時にまだ本格的に福音に触れていない人々に伝える伝道がなされなければなりません。主イエスが十字架にかかれ贖いをなし、神との和解の道を切り開いたことを無にしないための福音伝道、神の国のための福音伝道がなされなければなりません。何のための教会でしょうか。教会は神の国のため、神のご計画に仕えるための教会ですから、教会として本当のあり方をするための伝道が必要なわけです。

五、キリスト者とは誰か

誰も生まれながらにキリスト者である人はいません。主の福音を信じて、洗礼を受け、主のものとされることで、神の民の一人に加えられたのです。洗礼を受けて新しく生まれ変わりました。幼児洗礼を受けた人も、ただ母から生まれてきただけでなく、洗礼によって神の子とされたのです。それによって自然的にだけでなく、霊的にその母の子になったのです。キリスト者とは再生した人、再び生まれた人です。それには目標、何のためかということがあります。

キリスト者は罪にあるものでありながら、にもかかわらずキリストによって義と認められ、神の義に入れられました。私たちはなおこの世にあり、罪に誘われ、しばし

ば罪に落ちます。しかしそれにもかかわらず、もっと強力に主キリストのものとされ、義とされ、神のものとされて、聖化されています。義認と聖化があるだけではありません。「派遣」があります。この世にあるのは、本国を天にもちながらキリストの大使としてこの世に派遣されていることを意味します。当然、目的をもって派遣されています。主イエスによる神の恵みを伝え、和解の福音を伝え、神の国のために選ばれた人が主の弟子とされるために、私たちキリスト者は派遣されているのです。主イエスの証人として、聖霊の器として、神のご計画に用いられるために派遣されています。神の恵み、神の愛を伝えるため、伝道するために再生させられたと言ってよいでしょう。伝道者は伝道します。しかしすべてのキリスト者が伝道する者です。

六、伝道の熱心

教会生活の中で伝道の熱心を身につけるように心掛けたいと思います。伝道する教会の中で共に伝道する信徒でありたいと思います。伝道の熱意、伝道の熱心、ミッシヨナリー・スピリットが教会員全体にある教会、そしてそれが教会生活の中に、その祈りの中に滲み出てくる教会が、真の教会の姿ではないでしょうか。教会生活を過

ごす中で伝道のパイエティが養われる教会であるべきです。伝道のパイエティを育成する場としては、礼拝そのものがすでにその場であり、さらに祈り会、聖書の学び会、家庭集会、地域の集会など、また信仰告白や信仰問答の学び、そして特に修養会の機会があります。

礼拝の中で「聖餐のパイエティ」が重大な役割を果たすことにも注意を向けたいと思います。聖餐はその意味を知って誠実な思いで受ける必要があります。誠実に与る聖餐の中で、私たちは十字架にかかられた主イエス・キリストに結ばれます。主の復活の命にあずかります。そして主にある兄弟姉妹とともに、神の国でもたれる神の民の祝宴にあずかるのです。あずかるべきであって、なおあずかれない人のあることも覚えます。誠実に与る聖餐は、主イエスの十字架と神の国の間にあって、私たちの感謝の応答、献身の決意を新しくする機会になります。洗礼は一度限りの聖礼典で、主のものとされ、永遠に主のものとされたことを意味します。しかし聖餐になぜ繰り返しあずかるのでしょうか。聖餐にあずかって、繰り返しキリストとその御業に生かされ、真の神の民として養われるためです。感謝と献身の志を新しくするためです。聖餐を受けた後に祈られる祈りに心を込めるべきです。「あなたはこれによって、御子

イエス・キリストのあがないの恵みをわたしたちのうちに確かめ、わたしたちの罪をゆるし、汚れをきよめ、とこしえの命を与え、み国の世嗣ぎとしての望みを堅くしてくださいました」。こう祈って、また次のようにも祈ります。「キリストの復活の力が知り、その苦しみにあずかり、おりを得ても得なくても、みことばを宣べ伝えることができずように」。聖餐に誠実にあずかることは、伝道のための献身、その意志と祈りを熱くします。聖餐のパイエティは、伝道のパイエティでもあります。

聖餐式を「誠実に守る」ということは、「それによって生かされ、支えられる仕方です」ということです。私たちは、説教を通して聖書によって聞く神の言葉によって生かされます。同様に聖餐によって、キリストの十字架の恵みにサクラメント（聖礼典）的にあずかり、神の国を望み見、伝道に献身し、主に従っていく志を堅固にさせられます。伝道の熱心に燃やされる教会は、神の御言葉が力を發揮している教会です。そして聖餐が信徒を慰め、生かし、主に従っていく力を与えている教会です。

七、どう伝道するか

具体的にどう伝道するのでしょうか。どう伝道するかは、押し付けられてでなく、主の憐れみのうちに自由な感謝の応答として、それぞれの教会として、またそれぞれの個人として、祈りのうちに示されることです。しかしそれにしてもまずは、救われた確かさ、その喜びをもって生かされていることではないでしょうか。それがすでに「無言の行い」（ペトロ一、三・一）として主を指し示します。主に生かされることが、すでに伝道的です。この点ではヨハネによる福音書一二章九節以下のラザロに学ぶことができるでしょう。ラザロは何も特別なことをしてはいません。主によって生き返らされたことが、何よりも雄弁にすでに語っていたのです。

私たちも救いに入れられた喜び、キリストのものとされた喜びのうちに、主とその福音を伝えます。機会を捜して教会を示し、教会へと案内します。結果は神にゆだねて、主の伝道に用いられることです。「家族伝道、信仰の継承」は重大です。夫、妻、子、孫に対して、もちろん強制はできません。しかし真剣な願いを持ち、最後まで諦めず、私にとって一番大事なことは主のものとされたことだと伝えます。最後は遺言の形でも伝えたいと思います。サムソンは死のときに打ち負かした敵の数が、それ

前の数より多かったと言います（士師記一六章三〇節）。もちろん伝道は敵との戦いとは異なります。殺すのではなく、生かすことです。赦しを伝え、愛することです。しかし最後の証言の機会があるということは、考えさせることではないでしょうか。しかしそのために今、毎週の礼拝生活が伝道の喜びを支え、育むわけです。

それぞれ自分がどのように教会に導かれたか、主イエスとお会いできたかを思い起こす必要があると思います。教会には証がいっぱいつまっているはずですが。私は家にあった聖書がきっかけで教会を捜し、電話帳で住所を見つけました。今なら若者はネットで捜すでしょう。私の場合、私の母に聖書を与えてくれた見知らぬ人が、私に最初の伝道をしてくれました。

伝道集会のとき、教会員全員で何らかの形で参与して、全員で準備する必要があります。祈って、誘うように心掛けます。葉書や案内も出すでしょう。できれば声をかけることです。暇だからするものではありません。多忙な人もしなければならぬ。長老や役員は率先してそれをすべきです。それが教会の行き方です。長老や役員が伝道に参加しないようでは伝道する教会の形成はおぼつきません。いきなり教会に来ることのできない人でも、家庭集会には来ることができるかもしれません。教会にじかに

誘えなくとも、教会がここにあると示すことはできます。小さなことでよい。小さなことを誠実にすることで、伝道は一步前進します。

小さなことを誠実にということは、大きなことを考えるべきでないというのではありません。キリスト教的な事業を起こせる人がいれば、起こして欲しいと思います。キリスト教的な高齢者介護の事業や、さまざまなキリスト教的なボランティア活動が可能であれば、社会と教会とを繋ぐ意味で工夫をして欲しいと思います。助成金を受けているので、キリスト教色を薄めるといった要らぬ配慮は無しにすべきです。アメリカの教会では社会と教会を繋ぐ種々のグループ作りがなされます。最近、私の家の飼い犬が死に、ペットの火葬や遺骨を納める事業を、仏教が行なっているのを知りました。ペットによる癒しとか、ペット・ブームと言われています。その時代にキリスト教会はほとんどこの面に手がつけられないでいます。結婚式は大半がキリスト教的（教会式というそうですが）にしたがると言われ、これも教会に結び合わせられないでいるのが実情です。こうした種々の分野をキリスト教的に開拓する志を与えられたキリスト者が起こされれば、それは是非していただきたいと思います。国際化の進んだ時代ですから、政治の世界にもキリスト者の活躍は期待されています。

そうした種々の動きが起こるためにも、ここではもっとも基本的な伝道の一步として、各地域の教会が伝道的に再生することを願っているわけです。そのためには小さなことでよい、地域の教会の伝道に仕えて、誠実に実行することです。

IV

第五章 何によって伝道者・牧師になるか

はじめに

「新しい伝道者像」について語るように求められました。伝道者の養成を使命としている神学校の教師として、これからの伝道者・牧師についてどう考えているかを語るように求められることは、当然のことと思います。しかし「新しい伝道者像」を問うというだけで、従来の伝道者・牧師では通用しない事態が現われているか、かつての伝道者・牧師とどう異なる「新しい伝道者像」を考えているかと問われるとしますと、私は意識的に「新しい伝道者・牧師像」を考えているわけではありません。時代や状況の変化は色々と感じ取られますが、私は伝道者・牧師のあり方を根本から変えるものとは理解していません。

一、新しい時代と伝道者

考えさせられている一つの話は、戦前・戦後の国家的秩序の転換を契機に伝道者・牧師になった世代が、ほとんど伝道の第一戦を退く時代を迎えたということですね。世代論的に考えますと、このことは「明治のキリスト者の第一世代」の終りのときと多少類似の意味を持ちます。国家的秩序の転換期は、古い権威の崩壊によって、「有為の青年」がキリスト教会の中に新しい生き方を見出す機会になる面があります。しかし今では伝道者・牧師はとうに「転換期」が与えたいわゆる「有為の青年」ではありません。このことに関連して伝道献身者の量と共に「質」が落ちているのではないかと問われることがあります。重大なのは「牧師の力量」の問題です。「新しい伝道者像」の問題として伝道者の「力量」や「スケール」が考えられなければならないでしょう。何が伝道者・牧師に力を与え、そのスケールを大きくするのでしょうか。これが一つの問いです。

時代は変化し、かつての状況と異なる新しい問題に直面していることは明らかです。すでに「高度技術による産業社会」と「グローバルな文化多元主義」の時代であり、久しく「世俗的、現世的な価値意識」の時代に入っています。自己決定、自己実

現、自己利益が言われ、世俗主義的な幸福主義がインターネットを媒介にしながらローバル化しています。他方では文化と宗教の原理主義的衝突をまのあたりにしながら宗教や価値観の相対主義に陥り、規準喪失に立ち到っています。これら時代の要素や性格は、世界と人生の問題を混乱させることはあっても、解決を与えることはないのは明らかです。世俗主義的な幸福主義が示す解決は、つかの間の快樂の虚偽にすぎないことが多いのは誰の目にも明らかでしょう。新しい時代はまるで古代ローマ帝国の崩壊期に類似しています。「新しい禁欲」と「寛容をもった真理の確信」が与えられなければ、人類の精神的崩壊は進んでいくとさえ思われます。「イエス・キリストの十字架の死と復活の出来事」による啓示と救いを、新しく語る伝道の言葉が必要とされています。新しい時代の伝道者・牧師は、時代の人間と世界の問題を洞察しつつ、新しい言葉によってキリストの出来事とその意味を深く理解する福音の言葉を語りなおさなければなりません。

その場合にも、一体、伝道者・牧師とは何であるか、何によって人は伝道者・牧師になるかという問題は、時代の新しさの中ではなく、イエス・キリストによる救済の出来事の新しさ、その終末論的な新しさの中に解答があります。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(コリント二、五・一七)。このキリストにある新しさの中に「伝道者」としての存在根拠を認識し、そもそも伝道者・牧師とは何か、何によって人は牧師・伝道者になるか、改めて認識しなければなりません。

二、伝道者・牧師の仕事

伝道者・牧師は何をするのでしょうか。伝道者・牧師の仕事は、決して一定の内容のものとして規格化され、固定化されているわけではありません。「キリストに代わって願う」ことが基本で、「福音のためにはどんなことでもする」のが伝道者・牧師の生き方です。しかし牧師の仕事が一定の内容に規格化され固定化されていないことは、むしろ伝道者・牧師の仕事の難しさを意味しています。伝道者・牧師の仕事には自由があり、それぞれの工夫がなければならず、それぞれ自分自身の伝道者の姿勢を立てなければなりません。そこにすでに伝道者・牧師の力量が求められます。しかしそれにしても「言葉」によって説教し、神の救いの御業と御旨を告げ、「礼拝」に奉仕することを欠くことはできないでしょう。伝道者・牧師はそれぞれに「説教」の

修練を積み、「礼拝」に仕えることを不可欠にしています。礼拝が力ある、また喜びに満ちた、生きた礼拝になるように修練しなければなりません。礼拝の「説教」と共に「牧会」があることも、いよいよ重大です。「礼拝」の中の「祈り」がすでに生き生きと神に祈って、会衆をとりなし、慰め、力づけるものでなければならぬでしょう。牧会しない牧師を考えることはできません。牧師は、説教の達人だけで通るものではありません。牧会の達人であることを必要としています。すぐれた説教は、すでに牧会的な配慮と力、そして知恵を必要としています。高齢化社会はいよいよ牧会を必要とするでしょう。多くのキリスト者が、人生の最晩年の幾年の間、教会に足を運ぶことができず、家で、あるいは介護施設で過ごしています。人生の最後に必要なのは、説教する牧師より、牧会する牧師です。牧会の中で説教してくれる牧師です。これまで経験したことのない状況の中で、人間理解を深く持った「牧会」のありようが求められています。

伝道者・牧師は、「説教」と「牧会」をすればそれでよいというでもないでしょう。キリストの三つの職能になぞらえて言えば、説教という預言者的な職務と、牧会という祭司的な職務があればよいのでなく、王なるキリストに倣う牧師が必要です。

キリストは教会の主、頭として、神の民を統治し、守り、導いてくださいます。牧師はこのキリストに従い、群を守り、治め、指導しなければなりません。教会を守り、治め、進むべき方向に向かわせるリーダーとしての務めが果たされなければなりません。「治会長老」と「説教長老」を区別する職制の考え方もないわけではありません。しかし日本の教会の現実で言えば、群のなかに起こる分裂や混乱、あるいは群れの外から侵入する試練や動揺に対し、神の民の平和を維持し、向かっていくべき方向に歩ませる指導的な責任を牧師は免れることはできません。

プロテスタント教会に伝統的なキリストの三つの職能になぞらえて伝道者・牧師の仕事について申しましたが、このすべてについて従来、教会論的にのみ考えられてきたことを、同時に伝道論的にも考え直さなければなりません。福音をいまだ真実に聞いたことのない人にどう語り、配慮し、指導するのか。教会形成を内向きに求心化させるだけでなく、同時に外に向かって一歩でも半歩でも踏み出さなければならぬわけです。中世ヨーロッパの閉鎖的社會ではなく、古代地中海世界で異邦人と接触を展開した教会、ラテンの世界ではなく、聖書の世界が、現代の世界の信仰と生活との規範です。

説教の力、牧会的配慮の豊かさ、そして個人と共同体に対する指導力、しかも内を整え集めるとともに、外に派遣もする。どれ一つをとっても容易でない霊的な深さと力を必要とします。その全部に熟達するということになれば、誰もその任に耐え得る人はいないでしょう。伝道者・牧師ほど困難な仕事を負っている人はいないと言うべきだと思います。この仕事に耐え得るために何か手助けになるものがあるでしょうか。

三、牧師の神学

① 伝道者・牧師の召命と献身は神の真理にかかっています。牧師は神の真理を認識し、伝え、神とその民に関わる仕事を遂行しています。それを正しく遂行し、絶えず点検していくためには、「神学」が必要です。説教のために聖書のテキストと取り組み、注解書を適切に使用し、説教黙想を正しく営み、聴衆である人間の問題を深く理解し、生きた言葉で語るためには、牧師の信仰と共に牧師の神学が必要です。牧会の判断や教会指導を過たず、また時代の問題に直面しながら教会の存在と意味について理解しているためにも牧師の神学が必要です。教会においてなさなければならない判断は、いつでも黒白のはっきりした問題ではありません。どちらにも決断可能な中を

教会としてどう進んだらよいのか、教会の役員会・長老会を進めていく際に牧師の知恵が求められます。牧師の人柄や性格も重大な役割を果たすでしょうが、その根本にはやはり、問題の大小や軽重を過たず判断する牧師の牧会的な力量が求められます。聖餐の正しい理解と執行とに、神学が必要であることは言うまでもありません。「牧師の神学」とは「教会の神学」にはかなりません。力量ある伝道者・牧師は、神学的な理解があり、判断力のある伝道者・牧師です。神学の力量を欠いて、伝道者・牧師として力があり、深みがあるということではできません。伝道者・牧師を支える有力な手立ては「牧師の神学」です。

しかし今、この点で問題が起きています。「神学の空白」が起きていると思われるかもしれません。神学的な事柄が本当に分かる牧師が少なくなっているのではないのでしょうか。他方では、伝道者・牧師を支える神学本来の使命を果たさない、いうならば「擬似神学」が横行しています。牧師の側でも、神学の側でも「神学の空白」が起きているのではないかと思われまます。牧師が神学の判断力を失い、そもそも神学を理解しなくなったら、牧師の力量の低下ですが、同時に神学の低下にならざるを得ません。

② 最近、西東京教区の教師会の案内文の中に参考文献としてテオ・ズンダーマイアー

の文章「ノンクリスチャンは聖餐にあずかれるのか」(『福音と世界』、二〇〇六年一〇月、五四〜六五頁)が挙げられておりました。それはまさに神学的に貧弱で、誤りが一つならず含まれた、神学的に言って価値のない文章です。サクラメントのキリスト論的関連も教会論的関連も理解できていません。いかにズンダーマイアーが宣教学の人とは言え、サクラメントの神学的理解を欠いて伝道を語ることはできないでしょう。何をやってもキリスト教的アイデンティティが崩壊することはないとたかをくくったドイツ神学の中に起こりがちな誤りです。「教会の Gastfreundschaft」(客に対する親切心)のために聖餐を使用するといった暴論が記されています。ドイツ福音主義教会は元来「国民教会」(Volkskirche)として「教区教会」であり、「信じる者たちの教会」ではなく「住民の教会」です。そのため「信徒の交わり」を欠如し、教区外からの来訪者に対する受け入れの姿勢も、非キリスト者に対する伝道の姿勢も極めて希薄でした。それはドイツ福音主義教会の欠陥です。この欠陥を補うために敬虔主義者たちによるいわゆる「教会内の小教会」(ecclesiola in ecclesia)が聖書を共に学び、祈りをする交わりのグループとして発生しました。彼らの交わりはホスピタリティをもった交わりでもありました。しかしこれは牧師の指導とは別にもたれるこ

とが多く、ドイツ福音主義教会の中では排他的なグループになることもしばしばありました。いずれにしてもホスピタリティを豊かにすることは、信徒の交わり、コミュニティの充実によってすべきことであって、サクラメントを変質させることで解決を探るべき問題ではありません。また他宗教にある人間を信仰も洗礼もないままに聖餐に招くことで、ホスピタリティの欠如が解決するわけでもありません。ズンダーマイアーの主張は、次元と質の異なった事柄を混乱させた暴論とすべきでしょう。さらには聖書解釈も不十分で「子犬もパンくずをいただく」によって、「聖なるものを犬にやるな」を克服したといった、釈義と言えない聖書の扱いをしています。

③ どの国や地域でもそうですが、特にドイツ神学には時折、愚かな思想が発生しません。そうしたものに影響されるようでは、伝道者・牧師としてやっていくことはできません。神学思想の良し悪しを識別し得る「牧師の神学」がなければなりません。日本ではドイツ神学の弊害については、すでに明治二〇年代に流入した「新神学」の影響で伝道者・牧師の道を失った金森通倫のようなケースがあって、先刻経験済みですが、戦後も史的イエスとケリュグマのキリストの分裂とか、復活の事実性の否定とか、あるいは「ミッシオ・デイ」の主張の中でもホーケンダイクのような

な教会を周辺化させた思想（彼はドイツではなく、オランダですが）など、さまざまに惑わしがありました。ドイツ神学以外にも「解放の神学」のラディカリズムや「フェミニズムの神学」の中でも聖書の改竄かいざんさえ語る極端な主張によって迷わされた人々もいるでしょう。しかしそれは惑わされた側にも責任があります。「伝道」でなく「対話」といった主張も惑わせるものでした。「伝道」にはもちろん「対話」の契機が入るでしょう。会衆との対話の契機を欠いて「説教」がなされるはずはありません。牧師の書齋での説教準備にも「対話」は入ってきます。その上「書齋で説教を作る」と考えるのは、説教の正しい理解ではありません。しかし「説教」も、そして「伝道」も、「対話」に還元されるはずはないのです。主イエス・キリストが十字架に死なれ、「キリストの十字架がむなしものになってしまわぬように、言葉の知恵によらないで告げ知らせる」（コリント一・一・一七）と使徒が語ったとき、「伝道」を「対話」に還元すると言ったはずはないのです。説教、牧会、教会指導、そして伝道のために「牧師の神学」が重大な役割を担っています。牧師はその神学によって、この世やこの時代からくる虚偽や惑わしの言葉から教会と信徒の群を守らなければなりません。ただこの世や時代からくるものだけでなく、教会の中から生じる誤りの思想

からも守らなければなりません。

④ ところで、神学は他の学問と同様、現在、甚だしい専門分化の道を辿っています。旧約神学、新約神学でも、教理史でも、各部分での専門的深まりが甚だしいものになって、とても一人の人がその全貌を捉えることができなくなっています。組織神学もそうです。特に倫理学の部分的専門化は著しく、今や教義学、倫理学、弁証学を相互浸透的に概括することはほとんど不可能な業と言うべきでしょう。こうした神学の細分化、専門分化は決してこのままでよいとは思われません。しかしこの専門分化や詳細化に歯止めをかけることも困難でしょう。専門化をすべて無意味と言うべきでもないでしょう。神学の責任において専門化の道を遮ることも、またそれを辿ることも不可能です。専門化そのものでなく、専門化の方向や性格が問題です。どんなに専門化しても、本来の神学は「教会の神学」であり、「牧師の神学」であることは崩れないはずで、それはもちろん「信徒の神学」を否定する意味で語っているのではないことは、御理解いただけたと思います。神学の対象である「福音」や「神ご自身である真理」に、伝道も教会も根ざしており、牧師の職務も根ざしています。「牧師の神学」であることを否定する方向で正しい神学を語ることはできないでしょう。なし得

ること、そしてなすべきことは、「伝道者・牧師の神学」の視点を明確にもってそれらを識別し、あるいは統合することです。

⑤ 「牧師の神学」の骨子として、私は「三位一体論的な救済史の神学」を提示したいと考えています。それは「イエス・キリストの出来事としての歴史的啓示により、聖書の証言によって理解される三位一体の神の自由な決意による救済史の神学」です。この神と世界の歴史の中に、伝道と教会の不可欠な位置を知り、伝道者・牧師としての召しを理解するのが「牧師の神学」の骨子でしょう。この救済史の中で、イエス・キリストの十字架の死による神の世との和解は、それを宣べ伝える伝道とそれを信じる信仰とを要求しています。伝道を欠如して和解は完成しません。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」とヨハネも言い、パウロも「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました」（ロマ三・二五）と語って、「信じる者」の意味を明確に表現しています。キリストの十字架は「十字架の言葉」となり、それが「救われるものには神の力」になります。和解は伝道と信仰を求め、そして救済の完成にいたります。救済史のなかに伝道は不可欠な位

置を持ち、すべてのキリスト者が、そして伝道者がそのために用いられます。人間はそのために召されるのであって、ただ「無責任にそこにいる」ために創造されたのではありません。イエス・キリストの十字架の死による和解のなかに、聖霊の注ぎによる信仰をもって入れられ、三位一体の神の交わりに入れられて、神の救済史の実現のために全被造物に率先して参与することを許されています。

⑥ この伝道と教会の成長を軸におき、プロテスタント自由教会による「福音主義」の世界史的な意味を認識しながら、「キリスト教の世界政策」や「キリスト教倫理」も考えなければならぬと思います。倫理領域の細分化について指摘しましたが、それは主として近代の技術がもたらした前代未聞の経験に直面してのことです。その中で人命や人権の尊厳をキリスト教信仰の洞察によって理解しつつ、近代技術の可能性についても判断しなければなりません。またグローバルな規模での文化と宗教の多元主義の問題があります。「宗教的寛容」の根拠を明らかにしながら、信仰と伝道の確信を語らなければなりません。多元主義世界は宗教と文化の原理主義を強化することでアイデンティティを狭めて乗り越えるべき世界ではありません。日本の政治は目下、そういう狭いナショナルな方向を意図しているように思えます。日本のキリ

スト教会は、二〇世紀の六〇年代以降、左翼思想、新左翼思想による方向付けのために、過った倫理主義で疲弊させられました。新しい伝道者・牧師は、「キリスト教の世界政策」において過たないことが重要です。

⑦ 基本的に言って、日本と世界に「自由教会」としてのキリスト教会が堅固にされること、そして国家を超えて教会としての交わりと協調を保つことは重大です。JNAC解散後の状況において、北米諸教会との交わりを配慮し保持することに心がける必要があります。また日、韓、台のプロテスタント自由教会の交わりや協力も重大です。中国の教会事情については今後継続的に注目する必要があります。プロテスタント自由教会、福音主義教会の視点に立つアメリカ研究、特にアメリカのキリスト教的な歴史と教会基盤とを理解したアメリカ研究がなくてはならないでしょう。日本の経済界や政界のアメリカ関係は、概して表層的です。米国キリスト教会、それその良質の層と伝統とを理解する人が日本の教会にいないでしょう。またプロテスタント自由教会、敬虔主義の契機を豊かにもった福音主義教会の共通基盤を認識したアジア研究がなされる必要があります。日本のキリスト教会は世界を理解する窓を開き続けていなくてはならないでしょう。

四、牧師の力は外からくる

「資源は教育にある」という考え方があります。経済の分野でも、もっとも決定的なのは地下資源でも経済的なファンダメンタルズでもない、「人間力」であり、その人間力は教育によって開発されるというわけです。戦後の日本の復興時にも、経済復興を第一義とする行き方に対し、教育こそ決定的とする考え方がありました。経済開発や経済競争の中でも「教育こそが資源である」と言われます。実際、現在の情報技術の力、あるいは生物技術や資源技術でも「知の解決力」「知による生産力」は大きく、依然として「知は力なり」というフランス・ベーコンの言葉が当てはまる状況があります。事態を大きく転換させる鍵は人間にあります。その人間の力を開発するのは教育というわけです。こうした語り方は多くの場合、とどのつまり究極的な価値は経済にあったり、政治にあったりして、そのための方策として人間力が考えられ、教育は、政治や経済の手段に位置するという図式は変わらないことが多いと思われる。しかしそういう経済や政治第一主義に立っての手段としての教育重視ではなく、政治や経済を越えたさらに高次の目的としての人間、その救済という視点から、そして伝道の視点から、教育の重大さがやはりあると言わなければならないでしょう。

福音伝道の進展を願うとき、資源はどこにあるでしょうか。地下資源のように状況や環境のなかに、伝道が進展する可能性を探り求めるべきでしょうか。時代の転換を待つべきでしょうか。資源は福音そのものであり、一人の人間がそれによって変えられ、伝道に仕える霊的な力を増し加えられること、それ以外にはないのではないのでしょうか。伝道に対して深い意味で有力な伝道者・牧師が出現することによって、事態は変わってきます。もちろん伝道者・牧師だけではありません。信徒が育ち、教会が伝道する教会に変えられることが重大です。しかし伝道に対して霊的に有力な伝道者・牧師が育てられることが、そのためにも求められています。今まで伝道がそれほど進んでいなかった、しかしそこに一人の牧師が現われ、命を懸けた説教によって礼拝が生き返り、牧会に熱情が注がれ、教会が生き返り、信徒たちが変貌し、成長させられ、伝道が進む。そうしたことが実際に起きているケースがあります。それ以外の仕方では伝道が進むでしょうか。伝道は自然現象ではありませんし、社会現象でもありません。文化現象でもないのです。果報は寝て待って、寝て待っているうちに何かの拍子で伝道が盛んになり、ただ置いておいたら成長したということはないでしょう。財力とか、政治力とかを投入した結果、それだけで伝道が進むということもないで

しょう。伝道のために地の利を得ることは重要です。しかし地の利だけで伝道は進みません。地の利を活用する伝道者、そして信徒たちがいなければ伝道は進まないでしょう。伝道は伝道する伝道者・牧師、そして伝道する信徒が用いられて進むものです。そのとき伝道のために言葉の正しい意味で有力な伝道者・牧師が育てられることが重大です。

伝道に有力な伝道者・牧師は、どのようにして育てられるのでしょうか。「伝道者の教育」はどのようにしてなされるのでしょうか。「説教の力ある伝道者」「牧会者として優れた牧師」「教会のリーダーとして指導力のある牧師」は、どのようにして育てられるのでしょうか。説教の力の場合、「天賦の才」があると思える場合があります。しかしそれでは天性の資質があると言えない人の場合はどうなるのでしょうか。問題は説教だけではないでしょう。「牧会」についても教会の「指導力」についても、生まれながらに素質のある人がいると言えるかもしれません。その素質のない人は苦しみます。人間関係が性格上上手でない人もいます。生まれながら、あるいは育った環境からしてリーダーシップが身についている人と身につけていない人の違いもあります。それでは伝道者・牧師の能力はDNAで決定されているのでしょうか。そうい

う面を完全に否定することは難しいかもしれませんが。しかしそれだけであつたら、極端に言って、教えようがない、教育してもしようがないということになります。はたしてそうでしょうか。教育は神学校の課題ですが、それは土台造りにすぎません。伝道者・牧師は生涯、教育を受け続けます。教会によって教育され、伝道の経験によって教えられ、そして神学から教えられ、先輩や牧師仲間から、また教会員から学ぶのです。それによって天性の説教上手や牧会上手とは質的に違う、むしろ本当の説教や牧会に近づくのではないのでしょうか。説教も牧会も、教会の指導も、本当には天性の巧みさによってできるものではないでしょう。そこに宗教者としての信仰の深みが必要なのです。天性の巧みさや資質がないということに苦しむことも意味を持っています。人間の力が否定され、あるいは挫折して、一皮も二皮もむかれる中で現われ出る「霊的な力量」こそが必要なのです。伝道者・牧師の力量は、その人の中からではなく、その人の外から来なければなりません。そういう外からの力量を持った伝道者・牧師が起こされ、育てられることが必要です。生半可な才能や資質でなく、それが挫かれ、死んで、外から生かされる仕方では伝道者・牧師として立てられる経験が与えられなければなりません。

伝道者・牧師の力は外から、向こうからきます。伝道者・牧師のエネルギーも外から、向こうからきます。それは「神に対して生きる」ところからきます。キリストの十字架の死による「神の和解の御業」と「聖霊の働き」からきます。何が伝道者・牧師を支え、導くかはこの点で明らかです。それは「神の召し」からです。神の召しが伝道者・牧師を造ります。神が召し、そして御そばに置き、養い、育ててくださる。神に対して生きる霊的な場と力を除いて、それ以外で伝道者・牧師が力量を得ることはできないでしょう。神の召しを信じ、神に対して生きる霊的な生活の中で研鑽を重ねる以外に手立てはありません。神学教育もこの地平でなされるほかはありません。これが世代論を超えて力量ある牧師、スケールの大きな、深みある牧師が育てられる秘密です。国家秩序の転換期に人材を与えられる必要はないのです。生まれながらの才能も要りません。「神の召し」があれば、その召しに応じて「神に対して生きる」、そのための聖霊の注ぎがあればよいのです。大いなるスケールと力量、そして深みは、「霊の果実」として与えられます。そう信じなければならぬと思います。

五、牧師の生活

以上によって「牧師の生活」の基本は明らかです。それは、神から来る力を受ける生活であり、聖書に聞き、祈る生活、そして神学から学ぶ生活です。神の召しがある人を造りますが、そのことはまた召しに応えようと願う「祈り」がその人を造ることもでもあります。人間は本心から祈り続けているような人になります。このことは自然法則として言うことはできませんが、神の恵みのこととして言うことができます。

「伝道する者」にしてくださいと本心から祈り続けることによって「伝道する者」にされるでしょう。人間がそうされるためには、意志をそこに注ぐ願いが必要で、その意志や願いは祈りに示されなければなりません。神は人間を意志も祈りもなしに強制的に処理されることはなさいません。それは神の御意志ではないのです。人間の創造に示されたように神は人間を自由に意志し、応答し、祈るものとして、自由に応答する契約の相手として造られました。キリストの十字架の死による罪と悪の力に対する勝利は、人間を神に対して生きる自由へと解き放つ勝利です。人間は、キリストのものでされたことによって神への自由な応答へと回復されたのです。神は、人間がキリストによって与えられた自由により、自由に応答するように聖霊を注いでくださいま

す。聖霊は、自由を奪う仕方ではなく、あるいは自由な人間に代わって働くのではなく、人間の自由を確立しながら働きます。聖霊は「自由の霊」です。伝道者が伝道する力を与えられるように、伝道者自身が祈り、そして信徒が祈るべきです。そう祈るように信徒を指導すべきでしょう。伝道が不振と言われます。どこに原因があるのでしょうか。伝道が進むように本心から祈っていないからではないでしょうか。

「神の召し」は、その召しに応える特有の「エートス」を生み出します。それは召しに応える「祈り」が、エートスを作り出すと言ってもよいでしょう。神の召しとその召しに応えようと願う祈りは、「エネルギーの集中」をもたらすでしょう。召しに応えたいと願うとき、他のことを犠牲にするでしょう。それがエネルギーの集中ということです。伝道し、教会の成長に仕えることを優先順位第一のことにして、他のことを犠牲にし、他のことはみなそのためにする、そういう生き方が生まれます。神の召しがプロテスタンティズムの「禁欲」を生み出し、それが「資本主義の精神」を培ったと言われます。しかしそれ以上にあるべきことは、神の召しは伝道者の禁欲・エネルギー集中や自己修練を生み出し、福音伝道の精神を培うのではないでしょう。現代の世俗主義的な幸福主義を野放しにすれば、人類の精神的、倫理的な崩壊は

深まるばかりです。「新しい禁欲」が生まれなければなりません。それは人類の自己利益のための禁欲ではないでしょう。キリスト教会の伝道の精神としての「新しい禁欲」が生まれれば、それは人類的に意味あることです。

神の召しに応えることが訓練を生み出し、エートスをもたらすということは、神が生ける神であるということが新しい時代の伝道者・牧師をもたらし、新しい時代の禁欲をもたらすということです。新しい伝道者の力量とスケール、そして宗教者としての深みは、世代論的に生じるのではなく、あらゆる世代論に逆らって神から来るのであり、私たち自身の召しに応える祈りと共にきます。そのうえで神学から学ぶことです。「牧師の神学」から学ぶ。そして信徒に学んでもらうことです。牧師が学ばないから、信徒にも学ばせられない、それどころか学ばせられない状態が、今の状態にないと言い切れるでしょうか。知性偏重になるつもりはありませんし、その問題性も重々心得ているつもりです。しかし信仰の理解のないところに伝道は起きないのではないでしょうか。神の恵みの事実を理解した者は、知って喜び、感謝し、応えて生きる意志を発揮するでしょう。知らなければ献身は起こりません。聖書に聞き、祈り、そして神学に学ぶことです。

「新しい伝道者像」を特に語ったことにはならなかったかと思いますが、根本は「神に対して生きる終末論的な新しさ」の中に、どの時代にも妥当する新しさの秘訣があると思うのです。それは説教や牧会の苦心の中に、またキリスト教の世界政策の認識の中にも発揮されるでしょう。しかしそれはまず聖書によって御言葉を聞いて祈ることから出発するよりほかにないことです。初代の教会がそうであり、日本の教会もそうであった事実、伝道と教会は神の召しとそれに応えようと願う祈りから始まりました。この端的な事実に改めて立つことがまず必要なことと言わなければならないでしょう。御静聴ありがとうございました。

あとがき

本書は、日本基督教団美竹教会と同教会牧師上田光正先生の熱意によって成立しました。昨年の夏ごろだったと思いますが、今年（二〇〇七年）の五月二〇日に美竹教会で伝道礼拝の説教と、当日午後に講演をするようにとの依頼を受けました。講演で期待される内容についても、二〇〇九年にプロテスタント日本伝道が一五〇年の記念の年を迎えること、またそれをどう迎えるべきかについて語るよう求められました。その折さらに、その講演を中心にして「美竹教会文庫」第二巻として出版し、全国の教会と兄弟姉妹に送りたいというご提案でした。本書の第一章「プロテスタント日本伝道一五〇年―ともに記念し、ともに伝道するために―」は、その五月二〇日の講演です。それに若干の手直しをしました。

第二章「伝道の本質とする教会」と第四章「伝道の喜びに生きる」は、二〇〇七年一月八日、北九州地区信徒研修会などで講演したものです。その他種々の教会で語った講演が含まれています。第三章「現代に福音を伝える」は二〇〇六年七月九日、岩槻教会を会場にして持たれた同教団関東教区埼玉地区の役員・伝道委員研修会の講演です。いずれも今回、筆を入れていますが、それぞれ重複している部分もあります。同一の関心を類似の主題によって教会の兄弟姉妹に語ったわけで、内容の重複があることはご了解いただきたいと思います。

「伝道のための黙想」三編は、日本基督教団鳥居坂教会、ならびに銀座教会において行なった説教と関連しています。伝道のための聖書黙想としてはなお多くの聖書箇所が導きを与えてくれますが、ここでは三編だけを収録しました。

最後の第五章「何によって牧師・伝道者になるか」は、この中では若干異質なものとも言えますが、日本伝道を展望するとき、やはり牧師・伝道者の問題は不可避的な問題ですので、収録することにしました。これは二〇〇七年二月一二日に東京、中野のSCF会館を会場にして持たれた第六一回教職者懇談会における講演です。牧師・伝道者として召された者として自らの修練を考えて講演しましたが、同労の牧師・伝道者のために、また有為の青年が召されてともに伝道者・牧師として立っていただけることを心から期待しながら、掲載することにしました。

本書が多くの教会と、教職や信徒の皆さんに読まれ、「プロテスタント日本伝道一五〇年」を機会として共に伝道のために心を合わせ、また新たな思いで献身するために少しでも役立つことができれば幸いです。

「美竹文庫」の発刊の辞

私たちは、「教会は『伝道する教会』とならなければならない」という理念と主張を高く掲げて、この美竹文庫を設立する。その目的は、この理念に沿う良質な書物を集め、それらが誰にも手軽に入手できるようにして、広く世に浸透させることである。

思うに、今日における日本の教会の地盤沈下には著しいものがある。教会の高齢化と献身者の極端な減少は、すでに誰もが気が付いているであろう。小教会の統廃合の必要性は、すでに目前に迫っている。しかしそれだけではない。今日の日本におけるキリスト教は、どれだけ一般社会から尊敬を受けているであろうか。キリスト教は必ずしも誰もがすすんで入信しなかったときでさえ、社会から一目置かれていた時はあった。何か事あるときには、人々はキリスト者の意見にも耳を傾けた。国家社会の重大な危機のときには、たとい少数意見ではあっても、キリスト者の意見は必ず紹介された。しかし、今日の日本や日本社会においてはどうか。たとえば憲法改正の問題については、教界内では相当に見識の高い意見が披瀝されているのに、一般社会からは必ずしもそのような期待されず、従って注目もされていないのである。

確かに、日本のプロテスタント教会を代表する日本基督教団内の三〇年来の混乱が、今日このような事態を惹き起こしたことは否めない。しかし、更にその奥にある原因を問うならば、これらは必ずしも時代の流れから必然的に出てきたものではない。また、時が来れば自ずと神が解決してくださること、従って我々は、ただ傍観者のようにこれらを拱手して見ていけばよい、ということでもない。なぜなら、このような事態に立ち至ったことに対しては、我々伝道者自身の責任が大いに問われなければならない。また、今日における教会形成のあり方が大いに問われていると考える。

教会が伝道という主イエス・キリストからの尊い、光栄ある使命を蔑ろにするや否や、たちまちそれは気の合った人々だけが集まる心地よいサークルのようになってしまふ。その円滑な運営の為に、実に多大な努力とエネルギーが傾注されるが、教会内に悩みの種が尽きることはない。そして、いつの間にか、教会は塩味を失った塩のような無用の長物となってしまうのである。

私たちは更に、もう一つの事実にも絶えず注意を払うことを促される。即ち、私たちの教会が「伝道する教会」となるという歩みは、各教会それぞれ別々の歩みとしては成就できず、日本基督教団全体の、ひいては、日本の教会全体の歩みとならなければならない、ということである。このことには二つの課題が含まれている。第一の課題は、日本の教会全体がもう一度、聖霊降臨によって成立した初代教会の初心に立ち帰り、信仰的・霊的に覚醒されることである。第二の課題は、各教会が各個教会主義のエゴイズムから脱却し、考え方や伝統、教派の相違をも乗り越えて、公会主義の理念を生かし、伝道においてたがいに取り合うことである。

これらはいずれも、達成困難な「幻」には違いない。しかし、教会は幻を見てこそ教会として歩める。日本の教会全体が「伝道する教会」となるというこの一点において、同じ方向を向くならば、私たちの息子・娘の時代に於いて、それらは単なる幻ではなくなると思うのである。

私たちはこれらのことを考え合わせて、西暦二〇〇五年の教会総会に於いて、本文庫の設立を決議した。その目的は、私たちの教会自身がますます「伝道する教会」となると同時に、日本全国の教会の兄弟姉妹が一致して「伝道する教会」を目指すようになることである。その為に、少なくとも最初の三年間は、本文庫は無料配布を行い、本教会の伝道特別献金によって経費を賄うことを決意した。

二〇〇六年四月三〇日

美竹教会牧師 上田 光正



【著者略歴】

近藤 勝彦（こんどう かつひこ）

1943年 生まれ。

1966年 東京大学文学部哲学科卒。

1970年 東京神学大学大学院修課程終了。

1973～

1977年 チュービンゲン大学留学、神学博士号取得。

日基教団小岩教会、ペテル教会主任牧師を経て、
東京神学大学教授。鳥居坂教会協力牧師。

〈著書〉

（説教集）

中断される人生 / 1989 / 教文館

癒しと信仰 / 1997 / 教文館

クリスマスのメッセージ / 1999 / 教文館

窮地に生きた信仰 / 2002 / 教文館

（講演・エッセー集）

礼拝と教会形成の神学 / 1988 / ヨルダン社

教会と伝道のために / 1992 / 教文館

日本の伝道 / 2006 / 教文館

（神学プロババー）

トレルチ研究上・下 / 1996 / 教文館

デモクラシーの神学思想 / 2000 / 教文館

伝道の神学 / 2002 / 教文館

啓示と三位一体 / 2007 / 教文館

その他多数

プロテスタント 日本伝道百五十年

——ともに記念し、ともに伝道するために——

美竹文庫 No.2

2007年10月31日 発行

2008年1月22日 第2版発行

著者 近藤 勝彦

発行者 日本基督教団 美竹教会

牧師 上田 光正

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-17-17

TEL 03 (3409) 7401 FAX 03 (3498) 2941

URL <http://www.mitake-ch.or.jp>

郵便振替 00130-0-573594

印刷所 株式会社カワマタ印刷工芸社

〒135-0048 東京都江東区門前仲町1-11-2

TEL. 03 (3643) 1192 FAX. 03 (3643) 1194